

修士論文

表題 「大学保健体育の構造と機能に関する研究」

— 体育実技が学生の身体活動の実践に及ぼす影響について —



所属学科名

順天堂大学体育学部大学院体育学研究科
体育学科 体育社会学専攻

著者名

森 正明

指導教員

斎藤 定雄

合格年月日

昭和 53 年 3 月 6 日

審査委員

高橋 亮三

小宮 喜久

野子 三洋子

目次	
図表目次	4
緒言	6
第1章 文献考証	10
第1節 大学の構造と機能	10
第2節 大学保健体育の構造と機能	16
第3節 体育・スポーツ・身体活動	22
第4節 これまでの研究の動向	26
第5節 大学保健体育の現状と課題	28
第2章 目的・方法	31
第1節 本研究の目的	31
第2節 方法	34
(1) 「構造-機能」分析	34
(2) 「スポーツの社会化」による分析	38
第3章 手順	42
第1節 質問紙法	42
a) 調査項目	43
b) 資料の集計と処理	44
c) 結果と考察	45

第2節	感想文による分析	60
A.	「キャリアパターン」の比較研究	
	について	61
B.	作業方法に関わる考え	61
C.	方法	62
D.	結果と考察	68
第3節	レポートによる分析	72
A.	方法	72
B.	結果と考察	76
第4節	質問紙法と感想文・レポート	
	の比較	82
第4章	分析方法からの結果と考察	84
第1節	「構造-機能」分析	84
第2節	「スポーツの社会化」	
	からみた分析	89
A.	クロス集計からの分析	89
B.	感想文・レポートからの分析	95
C.	質問紙・感想文・レポートから	
	の総合的な考察	96

第5章 結論 ----- 99

第6章 要約 ----- 102

文献 ----- 106

英文要約

付録

(1.) 質問紙調査票 1 ~ 9

(2.) レポート調査票 (B4をA4に縮小)

(3.) 大学別に対する調査結果 1 ~ 7

(4.) 学年別・男女別 %表 1 ~ 20

(5.) 検定結果表

(6.) レポートによる分析

T. K. J. 図

図表目次

- | | | |
|------|---|--------------------------------|
| 図 1 | : | ニエーカムの行動過程図 |
| 図 2 | : | 大学生が休日の自由時間に 30分以上続けた余暇(昭和51年) |
| 表 1 | : | 帝国大学令 (明治19年) |
| 表 2 | : | 大学令 (大正7年) |
| 表 3 | : | 学校教育法 第52条 (昭和22年) |
| 表 4 | : | 定員数からみた大学規模 |
| 表 5 | : | 1,2年次 履修人数 (単純集計) |
| 表 6 | : | 大学別にみた運動部・同好会所属者・無所属者 |
| 表 7 | : | 学部別にみた運動部・同好会所属者・無所属者 |
| 表 8 | : | 学部別にみた学外スポーツクラブ所属者 |
| 表 9 | : | 学年別にみた運動部・同好会所属者・無所属者 |
| 表 10 | : | 学年別にみた学外スポーツクラブ所属者 |
| 表 11 | : | 男女別にみた運動部・同好会所属者・無所属者 |
| 表 12 | : | 男女別にみた学外スポーツクラブ所属者 |
| 表 13 | : | 学年別・男女別・タバコを吸っていない学生 |
| 表 14 | : | 学年別・男女別・健康診断 |
| 表 15 | : | 具体項目記入欄・無記・不明の出現率 |
| 表 16 | : | 51年度 スポーツハイキープ (実数) |
| 表 17 | : | 52年度 スポーツハイキープ (実数) |

表 18 : 51 年度 体操 (実数)

表 19 : (感想文による分析) 具体的表現

表 20 : レポートによる分析 (+, -, 評価) と (人数)

表 21 : レポートによる分析 (人数)

表 22 : 最も(は) (は) 行水遊心 (昭和29年大学生)

表 23 : 中学・高校の運動部経験と体育実技回数満足度

表 24 : 中学・高校の運動部経験と大学での体育実技好嫌

表 25 : 小学校の体育実技好嫌と大学体育実技好嫌

表 26 : 中学体育実技好嫌と大学体育実技好嫌

表 27 : 高校体育実技好嫌と大学体育実技好嫌

表 28 : 体育実技必修賛成者と小・中・高体育実技好嫌

表 29 : 体育実技必修賛成理由と小・中・高体育実技好嫌

表 30 : 修得後の体育実技履修と小・中・高の体育実技好嫌

緒言

大学に於て、教科目として保健体育がとり
 入れられたのは、1949年（昭和24年）新制大
 学発足と同時であつた。その初期に於ては、
 体育の施設及び用具が少なく、指導者に於て
 も充分とはいへなかつた。しかし、開始当
 時の体育科教育の目的は、「戦後の栄養事情
 や衣食住の欠乏から体育によつて学生の健康
 や体力を維持し、さらにこれを強化すると同
 時に卒業後の社会生活に於て、彼等がスポー
 ツや体育に対して興味を持ち、日常生活の中
 に於て健康生活を実現する。」^{11.)}という目的の
 もとに、設置されたものであつた。

現在の大学における保健体育は、その実施
 方法や内容に於ても大きな変化がみられる。
 それは、施設の充実、教育内容、指導者の配
 置などにもみられるが、大きな変化は、学生
 自らが、生活の中に身体活動を取り入れ、こ
 れを実践しようとする意欲が高まつたに事であ
 る。この傾向は、伝統的な運動部組織から離

れた同好会などのサークル活動としての組織が、急激に増加している傾向をみても明らかである。したがって現在の学生は、学業と共に身体活動に親しむという機会は、増加していると考え事ができる。そこで、大学時代における身体活動志向が、保健体育（特に体育実技）との様な関連を持っているものであるか、ここでは特に身体活動の実践についての問題をとらえようとする。

これまでの大学保健体育に関する先行研究では、学生の大学保健体育に対する関心度や希望種目などの態度、あるいは課外体育（特に運動部）の在り方などが、主な研究とされてきている。大学保健体育単位修得後の学生生活に於て大学保健体育がどのような影響を与えているかについては、ほとんどきわだつた研究がなされていない。この問題は、未だ研究の不足する領域であるといえる。そこで、本研究は今後の大学保健体育のために何らかの資料を提供できる研究としたい。

以下、第1章に於て、本研究の背景である大学の構造と機能について既存の調査結果によつて考察するとともに、大学保健体育の構造と機能について、その目的・目標などを歴史から考察する。そして、体育・スポーツ・身体活動などの用語の概念規定を行ない、これまでの研究の動向について明らかにしたのち、大学保健体育の構造と機能、(特に体育実技と身体活動実践との関連)の現状と課題について論述する。

第2章に於ては、大学保健体育に関する問題の所在を明らかにすることにより、本研究の目的を示したのち、その分析方法について、

①「構造-機能」分析

②「スポーツの社会化」からみた分析

の順に、その概念と方法を論述する。

次に、第3章に於ては、研究目的にしたがつて実施した3つの調査について、その概要を記し、第4章では、調査結果を記し、それについての考察を加える。

最後に結論として、先の二つの分析方法に
もとづき、調査結果を総合的に考察する。

第1章 文献考証

第1節 大学の構造と機能

本研究のテーマである「大学保健体育の構造と機能に関する研究」の概念規定として、本研究の対象である大学生をとりまく環境である大学をとり上げる。

まず、大学とはいかなる使命を持っているのであろうか。J.A. パーキンスの著「大学の未来像」によれば、「獲得・伝達・応用」という知識の三面は、制度の形をとって大学の持つ三つの使命に反映している。換言すれば、知識の獲得という面は、研究調査の使命遂行となってあらわれてくる。知識の伝達は、授業すなわち教育の使命遂行という形をとる。そして知識の応用は、大学の社会奉仕の使命と同一視されてよい。以上のことから、近代の大学の使命は、「教育」¹⁵⁾、「研究」、「社会奉仕」の三つである。」

いうまでもなく大学は、真理の探究の場である。その大学に於て、研究されたものが、

教授され、ひいてはそれが社会のために環元
 せなければならぬ。本研究のテーマであ
 る大学保健体育についても、「教育」、「研
 究」、「社会奉仕」の三つの使命が果たされ
 なければならぬ。日本における、大学の歴
 史は、「古く大宝律令の時代から存在したが
 今日の大学は明治以後欧米の大学を模範とし
 て設立されたもの。その後、明治19年の帝国
 大学令、大正七年の大学令などによって規定
 され、第二次大戦後は、学制改革により、学
 校教育法に基づいて設置され今日に至った。³³⁾
 といえる。

(表1) 帝国大学令 (明治19年)

14) 帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ
 攷究スルヲ以テ目的トス

(表2) 大学令 (大正7年)

14) 大学ハ国家ニ須要ナル學術ノ理論及応用ヲ教授シ並其ノ蘊奥ヲ
 攷究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及国家思想ノ涵養ニ
 留意スハキモノトス

(表3) 学校教育法 第52条 (昭和22年)

- 14) 大学は学術の中心として、広く知識を授けるときにも、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的および応用的能力を展開させることを目的とする。

これらの見解に基づき本研究では、大学を「研究、教育、社会奉仕の3つの使命を有する社会集団」として規定した。

次に、大学の構造について、統計的資料を用いて説明を加える。

「昭和52年度、全国大学一覧(文部省大学局大学課)によれば、昭和52年6月1日現在、大学数は、国立88校(20.4%)、公立33校(7.7%)、私立310校(71.9%)、合計431校(100%)となっているのを見ても明らかのように、日本の大学は量的には私立大学を中心として形成されている。大学設置年度別調を見ても、昭和37年度から昭和52年度までの15年間に、国立大学16校の新設に対して、私立大学では166校約10倍もの新設があった。大学学部教調では、昼夜間部を含めた数で、文学部128学部

(11.9%)、法学部 80 学部 (7.5%)、経済学部 124 学部 (11.6%)、工学部 120 学部 (11.2%)、医学部 73 学部 (6.8%) などが、中心である。上記の学部別入学定員調では、文学部 33067 名 (10.8%)、法学部 25225 名 (8.2%)、経済学部 38220 名 (12.5%)、工学部 52794 名 (17.2%)、医学部 7340 名 (2.4%) となっている。医学部は、学部数に比べて定員数が低い値を示している。最後に、大学都道府県別調では、4 年制大学、国立 13 校 (14.8%)、公立 1 校 (3.0%)、私立 9 校 (29.0%)、合計数 104 校 (24.1%) で東京が第一位であり、合計数第 2 位の大阪 34 校 (79%) の、実に 3 倍以上もの数を誇っている。²¹⁾

これらの結果から、現在の日本の大学は、私立大学中心の形成をなし、その地域も東京に異常なまでに集中している。

大学問題について、各方面からのさまざまなお示唆が与えられているにもかかわらず、その回答はいまだにだされていなのが現状である。

昭和46年6月、中央教育審議会(以下、中教審)の答申

「教育改革のための基本的施策」

一今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について一

から、大学は管理者、教員、職員、学生という異質な構成員からなる社会であるといえる。

また、新しい大学のあり方として、社会からの批判とその建設的な協力に道を開いた大学、つまり社会に奉仕する大学であることを指摘

している。これは、J.A.パークキンスが指摘した大学の使命に対応する。さらにこの答申で

は、新しい大学は、知識の伝達以上に新しい価値の期待として教育的な人間関係の重要性を強調している。このことは、人間疎外に陥

りやすい現代社会において重要な意味をもつばかりでなく、学生と教師の間では、学生が

教師との接触によって自己啓発の手がかりを得る機会となる事を渴望している。学生の地位と役割についても、今後、教育内容、方法

や教育環境の改善などに、学生の意見がとり入れられるようにと指摘している。これから大学の考えを考えてみるならば、教員と学生の接触の機会がより多く持たれることが重要な要素であるといえる。²²⁾

このことは、大学保健体育では特に重要な要素である。身体活動を通しての教育である体育実技に於ては、できるだけ多くの機会に早くお互いが知り合うことが、授業展開の第一歩である。

大学の構造と機能について、大学の構造は管理者、教員、職員、学生から構成された高等教育機関であり、多元的な社会であると規定する。そして大学の機能は、公共的な管理のもとにある社会的機関、学術研究者の自由な活動の場、知識や技術や資格を付与する機関、師弟と学友の教育的な人間関係の場であると規定する。

第2節 大学保健体育の構造と機能

大学保健体育の歴史は、第二次大戦後制度として確立され始まった。その創設の経緯は、第1に1946年のアメリカ教育使節団の勧告であるといえる。「……あまり身体的レフリエーションもしないで、長時間勉強しがちな大学でも、おなじような措置がとられるべきである。」¹¹⁾

「健康教育と体育は教育計画全体の基礎となるものであり、身体検査、栄養、公衆衛生の授業や体育と身体的レフリエーション計画を大学程度の過程にまで及ぼし、またできた¹¹⁾け、早く諸設備を改善することを勧告する。」とあり、大学における保健体育の必要性を示唆した。

第2の要因は、1946年9月文部省に戦後の体育の諸問題及び今後の方向について研究するため学校体育研究委員会が設けられ、12月29日その委員会の文部大臣への答申の中で、「大学体育の確立をはかり、全学生に体育を

機会均等に与えるため、最初の1年間には体育を正課として課すべきこと。」¹¹⁾を要望した。

第3の要因は、戦後における学制改革の教育における大きな転換である。1946年秋、文部省で大学設置基準設定協議会が設けられ、これは後に大学設置基準協会となり、さらに発展解消し、各大学の協力によって、1947年7月、大学基準協会が設定された。この協会は、大学自治の建前から、大学の基準は文部省の干渉を避け、大学自らの手でつくりあげることを目指して発足した。一方、文部省体育局長も、体育の機会均等、卒業後指導的立場に立つ者の健康と生活態度など一般社会に及ぼす影響の大きなものがあるとして、正課体育の必要性を要望した。

こうした内外の協力のもとに、1947年11月22日、大学基準協会の中における委員会が中間報告を提出し、基準委員会に於て体育を正課とすることが可決された。

既に大学における取得単位が、20単位と定

められていたので、追加された条項は、「大学は体育に関する講義及び実技各2単位以上を課すること¹¹⁾を要する。」
 「学士号を与える資格の最低要求は、七の4に定められた定義に従って決定された単位120及び体育の単位4を4箇年以上に獲得することとする。」¹¹⁾

以上によつて、大学に於て体育を必修の科目として採用することが決定したのである。

大学保健体育は、その根底に日本国憲法、第25条：「全ての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。」¹⁶⁾ という精神にささえられ、「大学体育を専門学科のいかんをとわず、すべての学生に必修の科目として履修させるのは、この憲法の精神にもとづき、機会を均等に与えたい。」¹⁶⁾ とするところに、又、W. H. O. の保健憲章：「到達しえる最高の健康基準の享有は、人種、宗教、政治的信念、経済又は、社会的関係の差別なく万人の基本的権利の一つである。一切の人民の健康は、平和と安全との達成の基礎であり、

個人と国家との安全な協力に依存する。」を
その精神の基本とするものである。

以上の精神を基本としてかけられた「大
学保健体育の目的は

(1) 学生の健康の保持増進

(2) 社会的・道徳的精神の涵養

(3) 身体に関する科学的知識と体育運動に
対する社会的・道徳的意義の理解

(4) 豊かな学生生活の醸成

(5) 価値ある社会生活を営むことのできる
社会人としての態度の養成

であるとしている。

さらに、その目標は

①保健理論：知識を習得し、自己及び他人
の健康に対する関心度を深め
る

②体育理論：体育・スポーツ・レクリエー
ション活動に対する理解と社
会的・道徳的認識を深める

③体育実技：体力の向上をはかり、スポー

ツやレフリエーションの技術
 を習得。且つ青年期の運動意
 欲を満足させ、学生相互間に
 好ましい人間関係を醸成して、
 社会的性格を育成

④ 余暇時間の体育的利用の習慣を養い、疲
 労回復、気分転換をけかり、学生生活に
 潤いを与え学習研究意欲をさかんにする

⑤ 体育運動学習：日常の生活活動安全、情
 緒の安定、社会的行為の
 基準に秩序あらしめる¹⁶⁾

である。

又、大学保健体育は開始当時「一般体育」
 という名称で始められたが、その後「昭和29
 年11月25～26日名古屋大学での分科会におい
 て、「保健部会」が設立され、これによって
 大学における「保健」の講義と健康管理の重
 要性が一般に認められるようになり、昭和31
 年11月26～27日早稲田大学に於て行なわれた
 第5回の大学体育協議会研究集会の席で「一

般体育」は「保健体育」という名称に変更された。こうして、身体活動から健康を求めようとする体育と保健の連繋によって、大学体育のいっそうの発展がはかられた。²⁹⁾

こうして始められた大学保健体育は、構造として大きくは、正課体育・課外体育・健康管理の3つから成立している。

正課体育は、カリキュラムとの関連で、保健理論・体育理論・体育実技の3つから成立している。さらに正課体育は、指導者・指導方法・評価・施設・単位認定などの構造から成立している。

課外体育は、学内体育と対抗競技(運動部)に二分される。

健康管理は、正課体育・課外体育とも関連し、健康診断を通じた大学生生活の中での健康管理が、卒業後の社会生活での健康管理につながることを目的とする。

その他、学生健康相談所や、正課・課外を両方取り扱う体育管理組織などが、大学保健

体育の構造であり、上述の目的・目標のそれ
が、いかに効果をあげているかということが
が、大学保健体育の機能である。

第3節 体育・スポーツ・身体活動

大学保健体育は、教育という範疇の中で、
体育科教育として存在する。C. A. Bucherによれば、
「体育科教育は、総合的な教育過程の一
部分であり、身体的・精神的な作用の発達を
目的としに領域である。そして、身体活動を
通して市民として社会に適応することを實現
していく手段である。」³⁾と規定している。

体育は、身体を通じた教育であることが
他の教科目とその性格を異にするところであ
る。体育が問題にされる時、常にスポーツと
どの様な違いがあるかということが、同時に
とりあげられる問題である。つまり、「体育
とは何か」、「スポーツとは何か」という問
いかけである。

では、体育とはどのように規定されるので
あるのか。

ニクソニとカズニズは、「体育序説」の中で、「体育とは、教育の全過程(whole process)の中で活発な筋肉活動と、それに関連する諸反応に関するものであり、またこれらの反応の結果として個人に起こる種々の修正作用に関するものである。」^{13) 5)}と規定している。

「大学保健体育の特徴は、

1. 「身体教育」：身体を目的として計画された活動。

2. 「身体活動を通しての教育」

スポーツ・レクリエーション活動を通して、自発的な活動により教育の一般目標に役立てようとする。」である。つまり、体育とは教育と切り離すことのできない教育の一環である。¹⁶⁾

「大学がその機能の一つとして formal education としての人間教育を行なう限り、²⁴⁾ 体育を除外するわけにはゆかない。」と指摘されるように、体育は、大学教育における重要な機能の一つであるといえる。

次に、スポーツはどのように規定されるのであろうか。

「スポーツを規定する条件として、

- a.) レシヤ - の枠内に止まること
- b.) 身体的活動であること
- c.) 自己目的的な遊戯の要素を持つこと
- d.) 常により高度なものへの挑戦があり、優越し、克服しようとする^{16.)} 不断努力のなかに満足と意義がある。」と条件づけられる。

ベルナール = シェによれば、「遊戯(楽しさ)、競争(闘争)、肉体的要素を含む活動²⁾である。」

スポーツを規定する時、「身体活動」とはどのように異なるものであろうか。その規定も同時に問題となる。

スポーツとは、「個人や集団の競争の形をとる運動競技及び身体運動(キョウブ活動やその他の野外活動を含む)であって、心身の健全な発達を促すためにされるものである。^{36.) 37.)}」と規定されるところから、身体活動は、「(

体操・スポーツ・ダンスなどを含む)心身の健全な発達を図るための運動である。³⁶⁾³⁷⁾」と規定することができるといえる。

本研究のテーマに於て、身体活動という用語を用い、スポーツ活動という用語を用いなかった背景は、上述のごとくである。

しかしながら、スポーツや身体活動そのものの規定に於ても、「スポーツとそれに類似した活動との境界線を引くこと」は困難である³⁰⁾といえる。

「体育」、「スポーツ」、「身体活動」などの規定については、今後とも問題になる領域である。そして、その明確な規定には、多くの困難が伴っている。そこで、本研究では、上述のごとく本研究なりの規定を行なった。

第4節 これまでの研究の動向

新制大学に於て正課として保健体育が実施されると同時に、大学における保健体育の研究も開始された。

特に日本の大学では、正課としての保健体育は新しい研究分野であるといえる。それだけに大学保健体育実施にあたって、これまで各方面からの研究がなされてきた。

「1.) 指導に関するもの

2.) 特殊コースに関するもの

3.) 運動能力に関するもの

4.) 夜間学生の体育に関するもの

5.) 評価に関するもの

6.) 効果に関するもの

7.) 運営に関するもの

8.) 人事組織に関するもの」^{29.)}などの項目に分けられる。

本研究では、このうち6.) 効果に関するものとして体育実技と身体活動の実践との関連について、大学生を対象とした。

これまでの体育実技の効果に関する研究では、
 「1959年、伊東明(上智大学)の卒業生
 を対象として体育実技の効果に関する研究に
 於て、運動部の生活、正課体育の感想²⁹⁾などを
 社会人の生活との関連でとらえた。」²⁹⁾や、「
 1961年、日本大学が行なった正課体育卒業後
 の感想²⁹⁾」²⁹⁾、「1963年、東海支部が行なった、
 大学保健体育における女子体育の効果に関す
 る研究調査、女子が社会人になつて受講した
 体育を活用しているか²⁹⁾」などがあげられる。

また、1967年10月、九州地区体育社会学研
 究会が発表した「大学における体育、スポー
 ツの社会学的研究では、学生の生活と体育、
 スポーツ活動をとらえ、卒業後の動向につい
 ては、運動部所属者を中心にした研究が行な
 われた。」²⁹⁾

体育実技とその効果についての研究では、
 上述の二つとその対象が社会人である研究が
 ほとんどであり、大学生を対象とした研究は
 少ない。

そこで本研究では、大学生の体育実技と身体活動の実践との関連について、社会学的分析方法に基づいて研究を行なう。

第5節 大学保健体育の現状と課題

1949年に開始された大学保健体育は、必修教科として制度上の確立をみた。実施方法、施設の改善として何よりも、研究分野としての体育学の確立が、新制大学における発展の最たるものであるといえる。しかし、これまでに順調に実施されてきたわけではない。

昭和46年に報告された中教審の答申：「高等教育改革の基本構想」において、今後には、学園生活全体を通じて体育を重視するとともに、全学生を対象とする保健管理を徹底することである。この場合、保健体育を卒業の要件として画一的に課するだけでは、本来の目的は達成されない。教育方針に応じて単位を弾力的に取り扱えるように改めると共に、指導体制の充実と施設の整備をはかるべきである。」²²⁾ という一つの指針が出された。

しかしこの問題は、今に解決をみないまま、従来通りの必修科目としての保健体育が実施されているのが現状である。この中教審の答申以後、さまざまの意見が出されているが、具体的な施策はまだ出されていない。

大学は、いうまでもなく教育機関であり、教員と学生の密なる関係をみのがすわけにはいかない。その中で大学保健体育は、学生にとっていかなる存在であるかということが、問題である。換言するならば、大学保健体育は、学生に何を与えることができるかということである。本研究のテーマである体育実技は、何を目的として実施され、終了時にはどのような効果が上がったか教員にも学生にも認識できることである。8割以上の出席をして、プログラムをこなすだけの授業で単位をとるだけならば、それは大学の必修教科としての存在価値はない。保健体育の目的、さらに具体的な表現を用いるならば、その授業の目的が学生に正確に理解されていなければ、

効果は上がらないということである。

現状での大学保健体育は、目的や目標の相互の理解が充分であるとはいえない。特に体育実技に於ては、施設等の関係もあり学生の不満も多いと考えられる。そこで、本研究では、体育実技を中心に論述する。

第2章 目的・方法

大学保健体育は、さまざまの問題をかかえながら、四半世紀を過ぎたといえる。ここで今一度考えなければならぬ問題は、今後の大学保健体育は、いかにあるべきかということである。そのために現在実施されている大学保健体育の実態を把握し、大学教育の中における保健体育の意義を明らかにすると共に、ここでは体育実技と大学生活における身体活動との関連について考察する。

第1節 本研究の目的

本研究では、大学保健体育の構造として規定した中から、正課体育の体育実技と大学生活における身体活動の実践との関連についてとらえようとする。大学保健体育は、上述したごとく5つの目的を有する。しかしその目的は、学生に充分理解されているとはいえない。

「²⁴⁾学校のスポーツは、一般的にそうであるように、飛達促進的機能と卒業後の生活への準

備としての役割が、強調されている。³⁵⁾と指摘されるように、学生の健康の維持増進と生活への準備段階としての役割が、その大きな機能であるといえる。

時間・場所・指導者と身体活動を行なうために必要なる要素を提供してくれる学校体育は、大学の体育実技の単位を修得した時点で終了する。体育実技が終了した学生たちは、大學生活の中でどのように身体活動とかがわっているのか。生活への準備段階としての役割が大きな機能であるならば、体育実技は、その後の身体活動実践のための準備段階であるといえる。

単位を修得したということは、いいかえりならば時間・場所・指導者の保証を失ったことであり、自分で捜さなければ、又やってみようと思わなければ、身体活動の機会がないということである。その意味でも、体育実技がその後の身体活動の実践に果たす役割は、大であるといえる。

それでは、現在実施されている体育実技は、その機能を果たしているのがあるうか。

本研究では、体育実技がその後の身体活動実践にどのように機能しているかをとらえようとするものである。

第 2 節 方法

(1.) 「構造 - 機能」分析

社会学辞典によれば、「構造 - 機能」分析は、「生理学の分析方法を社会体系 (social system) に適用した分析。体系内部の変数のうち、安定的なものを常数 (それが構造である) とし、常数とされない動的な変数を、構造ないし体系に対するその機能的意義、体系維持の機能⁶⁾ (か否か) において、構造と関連させて分析」と規定されている。

現代社会学入門「集団と社会」では、「社会関係集団・組織は、分析的に言えば相互行為のシステムすなわち社会体系である。そして社会体系の構成要素のうち比較的恒常的な要素の状態や関係を、その体系の「構造」 (structure) といひ、構成要素のはたらきが他の構成要素や上位の体系におよぼす正負の影響 (結果) を、その構成要素の「機能」 (function) といふ。構造と機能の間には、密接な関係があり、現在の構造と機能を維持するため、

「機能要件 (functional requisite)」と「構造要件 (structural requisite)」が働きあっていると考えられる。これから「構造-機能」分析とは、社会体系を構造と機能に関係づけて分析する手法である。換言すれば、社会体系を①まず要素間の相互依存関係、とくにそのうちの恒常的な構造を発見し、②その構造を維持するために必要な機能要件をさため、③体系のアウトプットが、この機能要件を充足しているか否かを評価し、④機能要件充足が不十分なときは、それを充足するために必要な構造要件を発見し、⑤その構造要件をみにするように構造を変動させる力が働く、という理論的枠組で分析することとなる。²⁶⁾

本研究では、このような考え方にもとづき大学保健体育の構造と機能について分析する一つの方法として「構造-機能」分析を用いた。大学保健体育は、管理者、教員、職員、学生という構成員からなる大学という集団のなかで、一定の社会関係をもって行なわれて

いるからである。さらに、正課体育と課外体育に区分された構造は、学生健康相談所や体育管理組織などと相互に関連し合っている。

本研究では、保健理論、体育理論、体育実技からなる正課体育のうち特に体育実技について、指導者、指導方法、評価、単位、施設、目的、目標などの構造との関連について「構造-機能」分析を用いることは、その相互の関連の解明に有効であると考えるからである。

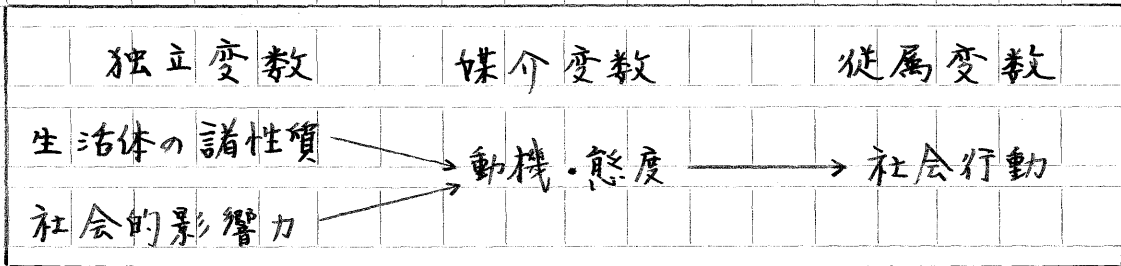
「構造-機能」分析の中で「変数間の相互依存関係の分析」については、藤原健固の「スポーツと社会化」によれば

「(a) 機能分析

変数間の相互依存関係 (interdependent or mutual dependent) の分析

社会学的諸変数を数学的の意味での「函数関係」(独立変数と従属変数の相互依存関係として定式化すること。)と規定している。

「ニューカムは、行動を社会現象の基礎過程として分析するために次の図を表わしている。



(図 1)

(ニューカムの行動過程図)

6)

本研究では、独立変数である大学保健体育の構造が、従属変数である機能に至るまでの過程（媒介変数）を明らかにし、とりあげた構造が機能するための要因について考察を行なう。

(2) 「スポーツの社会化」による分析

「構造-機能」分析によって研究が進行していくうちに、この分析方法だけではとらえることのできない問題があがってきた。それが「社会化」である。体育学の領域で用いられるところの「スポーツの社会化」である。本研究で、何故に「社会化」による分析が必要であるのか、その背景となるものは以下の通りである。

1.) 質問紙法による調査においては、記入している時点から過去の事実、経験についての記入が必要となる。

今回の調査を例にあげるならば、体育実技履修方法、運動部経験、学外スポーツ施設利用など。

2.) 過去の経験、事実との関連

例えば、小・中・高校で体育に好意的であった学生は、大学体育に好意的であるか否か。中・高の運動部経験者は、現在でも何らかの形で身体活動を行っているか

否か否かの問題。つまり、現在の行動は、こ
 れまでの事実、経験によって規定されている
 ことが多い。ここに「社会化」との関連が存
 在する。では、「社会化」とは、いかに規定
 されるのであろうか。広辞苑によれば、「社
 会化」(socialization)の人間の間の相互作用、
 影響の過程。②個人が集団の成員として同一
 化する³³⁾こと。」とあり、社会学辞典によれば
 「行動理論上の概念：パーソナリティと文化(こ
 の場合、制度化された価値志向形式)とを
 媒介する。とくに他者(両親)への依存状態
 にある幼児においては、生理的³⁴⁾要求の内面的
 充足、喪失と同じ程度に社会関係的³⁵⁾なつなが
 りが重要で、成人特に母の反作用に対して社
 会化の過程が進行する。その本質的形式は、
 大人との同一化である。この同一化により、
 幼児は大人の価値を自らに関連する文脈のな
 かで受容し、大人が欲することを幼児が自身
 のために欲するようになる⁶⁾。」とあり。さら
 に哲学事典によれば、「新入りの成員が社会

や集団の標準的な考え方や感じ方、行動様式を受け入れ、習得していく過程をいう。通例新生児がその社会や集団の規範を受容しつつ成人していく過程をさすことが多いが、成人後の個人が新たな集団に所属することによつて、以前の集団に特有な考え方や感じ方、行動様式の変更を迫られ、新たな規範を受容していく過程をさすこともある。したがって後者の場合は、一度成立した社会化の解除 (de-socialization) と再社会化 (re-socialization) とが要求される。³²⁾

以上のことから、本研究では(1)個人と集団の関係の中で、個人が標準的な考え方や感じ方、行動様式を受け入れ、習得していく過程。

(2)個人が集団の成員と同一化すること。と規定する。

こゝらの規定を体育学の領域に用いるならば、「スポーツの社会化」(Sports Socialization) は、「個人がパーソナリティと文化(この場合、制度化された価値志向形式)とを媒介と

して、既存の社会におけるスポーツ知識・ス
ポーツに対する態度、スポーツの行動様式を
獲得（内面化）していく過程である。」と規
定することができる。

第3章 手順

ここでは、研究目的にしたがって実施した
3つの調査

(1.) 質問紙法

(2.) 感想文

(3.) レポート

のそれぞれについて、用いるに至った背景を
記し結果ならびに考察を加える。

第1節 質問紙法

第1回テスト (昭和52年3月～4月)

対象：6大学、約20名

目的：調査項目の吟味

体育実技実施方法の大学差が明ら
かになる

第2回テスト (昭和52年5月～7月)

対象：A大学体育実技履修者1、2年生、約80名

最終調査票作成

本調査 (昭和52年9月～11月)

対象：6大学、1年生～4年生、415名

体育実技履修中の1、2年生には、

体育実技授業終了後に、担当教員に依頼して配布し、単位修得後の3・4年生には、所属学部のゼミの教員及び学生に依頼して配布した。大学別の対象者数は、A大学、207名、B女子大学、57名、C大学、66名、D大学、43名、E大学、11名、F大学、30名、合計数、411名（無効4名）である。

対象とした大学は、D大学が国立大学であり、他は全て私立大学である。又、A大学を中心に調査を行なった。

表4 定員数からみた大学規模

	1000以内	1000~3000	3000~5000	5000以上
A 大学			4630	
B 女子大学	1000			
C 大学	700			
D 大学	730			
E 大学		2395		
F 大学				7980

a) 調査項目

1. 社会的背景として、定職、アルバイトの有

無とその内容 出身高校所在地 住居形態

2. 大学体育実技実施方法として 履修人数

種目選択方法 履修回数 大学運動施設

更衣室 シャワー施設

3. 大学内及び大学外クラブ・スポーツサークル

活動の有無とその内容 程度について

4. 体育・スポーツに対する態度

A: 体育実技に対する評価

体育実技の効果に対する態度

保健理論・体育理論に対する評価

B: 大学におけるスポーツ活動に対する態

度

5. 大学保健体育に対する要望・意見

要望や意見の有無とその内容

b.) 資料の集計と処理

調査結果の集計と処理は、東京大学大型電子計算機セニターと千葉工業大学の FACOM-SDA を用いて、機械による集計を行なった。

単純集計 大学別 学部別 昼夜別 男女別 学年別 及びクロス集計を行なった。

C.) 結果と考察

1.) 単純集計による社会的背景としての定職アルバイトの有無とその内容については、定職を有する学生は総数15名で、全員A大学二部の学生である。これは、二部の学生の24.6% (N=61名) である。

アルバイトについては、一部126名・38.3% (N=329)、二部25名・43.1% (N=58) の学生が行っており、その内容は、一部二部を合わせて家庭教師が90名・62.5% (N=144) で第1位である。

出身高校所在地については、関東が257名62.5% (N=411) であり、今回の調査の対象者は関東に集中している。

住居形態については、自宅通学者が223名53.9% (N=414) で第1位、次にアパート・下宿通学者が153名・37.0% (N=414) である。

2.) 体育実技履修における履修人数は、以下の通りである。

表5 1,2年次履修人数(単純集計)

人数	1年次		2年次	
	実数	%	実数	%
~ 30	88	22.3	93	29.5
30~ 40	72	18.3	76	24.1
40~ 50	67	17.0	77	24.4
50~ 70	148	37.6	61	19.4
70~	18	4.6	8	2.5
その他	1	0.3	0	0.0
計	394	100.0	315	100.0

大学別にみると1年次はA・B・F大学で(50~70名)中心, C大学で(30名以内), D大学(30~40名) E大学(40~50名)である。2年次ではF大学が(50~70名)・A・E大学(40~50名)・B・D大学(30~40名)・C大学(30名以内)である。

種目選択方法ではB大学の1年次が指定であり、その他の大学は1・2年次とも選択である。

運動施設については、大学別にみると学部と同じ場所に陸上トラックを有している大学は、国立D大学だけである。

体育館とプールを有している大学は、B・C大学の2校、体育館のみを有している大学はD・E大学である。A・F大学はどちらも有していない。

更衣室は、各大学とも有している。

シャワー施設については、履修種目との関連で「ある」という回答と「ない」という回答に分かれる。314名・77.1%(N=407)の学生が、温水加水シャワーがあると回答している。

しかしその利用度は、「毎回使用」が23名、「ときどき使用」が51名であり、245名・75.4% (N=325)の学生は、全く使用していない。

3.)

① 学内スポーツサークル所属

表6. 大学別による運動部・同好会所属者・無所属者

大学	運動部		同好会		無所属		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
A	8	3.9	34	16.5	164	79.6	206	100.0
B	2	3.6	14	25.0	40	71.4	56	100.0
C	10	15.2	12	18.2	44	66.7	66	100.0
D	14	32.6	0	0.0	29	67.4	43	100.0
E	1	9.1	1	9.1	9	81.8	11	100.0
F	0	0.0	7	23.3	23	76.7	30	100.0

学内スポーツサークルについては、運動部・同好会所属者の合計が103名・25.0% (N=413) であり、学内活動はさかんであるとはいえない。

② 学外スポーツクラブ所属

学外所属においても、所属者58名・14.3% (N=407) であり、さかんであるとはいえない。

③ 対象者のスポーツサークル所属

運動部・同好会・学外クラブ所属者の合計は、161名・38.8% (N=415) であり、学内・学外に

が小かたに所属して身体活動を行なっている学生は、決して多いとはいえない。

この結果は、1976年3月都立大学が中心となつて行なつた「大学生を対象とした体育・スポーツに関する調査」¹⁹⁾の結果、クラブに加入している学生63名・33.7%(N=187)に、行け対応している。

表7. 学部別にみた運動部・同好会所属者・無所属者

学部	運動部		同好会		無所属		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
文学	4	7.5	7	13.2	42	79.2	53	100.0
家政	2	4.0	14	25.0	40	71.4	56	100.0
経済	0	0.0	1	10.0	9	90.0	10	100.0
商学	0	0.0	6	23.1	20	76.9	26	100.0
法学	3	3.0	8	9.2	76	87.4	87	100.0
理工	4	5.5	20	27.4	49	67.1	73	100.0
農学	12	30.0	0	0.0	28	70.0	40	100.0
人文	10	15.2	12	18.2	44	66.7	66	100.0

表8. 学部別にみた学外スポーツクラブ所属者

学部	所属		計	
	実数	%	実数	%
文学	1	1.9	53	100.0
家政	21	38.2	55	100.0
経済	1	11.1	9	100.0
商学	6	24.0	25	100.0
法学	3	3.0	88	100.0
理工	5	18.3	71	100.0
農学	5	12.5	40	100.0
人文	8	12.7	63	100.0

学部別にみた運動部・同好会所属者については、どの学部も低調のようである。学外スポーツクラブ所属者は、今回の調査に関する限り、家政学部がめだつてゐる。

表9 学年別にみた運動部・同好会所属者・無所属者

学年	運動部		同好会		無所属		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
1	6	7.9	17	22.4	53	69.7	76	100.0
2	14	7.1	33	16.7	151	76.3	198	100.0
3	7	8.3	7	8.3	70	83.3	84	100.0
4	8	15.1	11	20.8	34	64.2	53	100.0

表10 学年別にみた学外スポーツクラブ所属者

学年	所属		計	
	実数	%	実数	%
1	5	6.8	74	100.0
2	35	17.9	195	100.0
3	10	11.9	84	100.0
4	8	15.4	52	100.0

表11 男女別にみた運動部・同好会所属者・無所属者

性別	運動部		同好会		無所属		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
男	15	8.0	22	11.8	150	80.2	187	100.0
女	20	8.9	45	20.0	160	71.1	225	100.0

表12 男女別にみた学外スポーツクラブ所属者

性別	所属		計	
	実数	%	実数	%
男	28	15.3	183	100.0
女	29	13.0	223	100.0

学年別にみた運動部・同好会・学外スポーツクラブ所属者では、きわだ、た学年はない。男女別では、女子の同好会所属者が、今回の調査では、めだ、っている。

4.) 体育・スポーツに対する態度

A: ① 体育実技に対する評価

履修種目に対する満足度は、大学別にみると、B大学1年次の23名・41.1% (N=56) を除いて1・2年次とも満足している率が50%以上である。B大学1年次は、履修種目が指定されてい、ることに影響を受けてい、るようである。他の大学では、1・2年次とも選択による種目が履修されてい、る。

学年別にみても、1年から4年まで全学年が半数以上満足している。

男女別にみると、女子の方が男子に比べて満足している率が低い。履修種目の満足度の男女差は、1・2年次とも5%水準で有意である。(X²検定)

履修回数に対する満足度は、「ちょうどよい」とする学生が全体で276名・66.7%(N=396)であり、大学別・学部別とも、週に1回を支持している。週に1回では「少ない」とする学生は学年別で見ると学年があがるごとに率も増加し、男女別では、女子より男子の方に「少ない」とする学生が多い。χ²検定では、学年別で有意差はないが、男女別では、5%水準で有意差がある。

体育実技必修については、全体で60%以上の学生が必修を支持している。

大学別・学部別ではB大学家政学部で、40%台であり、他の大学・学部では60%以上支持している。

学年別では、2年が104名・52.8%(N=197)で最も賛成率が低い。

男女別でも、必修賛成者は男女共に多い。

以上のことから、体育実技必修については好意的な学生が多いといえる。

これは都立大学の調査結果「必修に賛成」が全体で140名・74.9%(N=187)であることに対応し、さらに九州地区体育社会学研究会(1976)の結果、男子(70.0%)、女子(75%)が必修に賛成していることに対応している。

体育実技必修賛成理由としては、大学・学部・学年・男女別とも「運動不足解消」を支持している。

「必修・選択は別として体育実技はあつた方がよいですか」という問に対しては、324名82.1% (N=413) の学生が「あつた方がよい」と回答している。

「他教科目と比べて体育実技は好きな方ですか」という問に対しては、「非常に好き・好きな方」とする学生は、222名・53.9% (N=399) であり、「嫌いな方・大嫌い」とする学生は、41名・10.9% (N=399) と少ない。

② 体育実技の効果に対する態度

体育実技を履修して、運動不足を感じた学生が、何らかの身体活動を始めたと回答した学生は、全体で91名・30.5% (N=298) であり、始めていない学生は、207名・69.5% (N=298) である。

学年別では、身体活動を始めた率は、4年→2年→3年→1年の順となっているが、実数が少ない。

男女別では、女子より男子の方が身体活動を始めた学生が多いが、大差はない。

現在、学内・学外いずれかのクラブに所属している学生の始めたきっかけについては、男女共に、「友人の紹介」と「入学時の勧誘」が中心であり、「体育実技」がきっかけになった学生は、3名である。

「体育実技を履修してどのような事を感じましたか」という問には、大学・学部・学年・男女別のそれぞれに、「スポーツの楽しさ」が第1位である。

「単位修得後、運動する必要を感じましたか」との問には、50%以上の学生が感じているが、そのうち必要を感じて運動を始めた学生は、全体で64名、36.0% (N=178) であり、学年別にみると多少ではあるが、2年、3年、4年とその率は上昇している。男女別では、男子の方が運動を始めた学生が多い。

「修得後に選択科目として体育実技があれば、履修しますか」との問に、「履修する」

と回答した学生は、全体で84名・24.4% (N=292) である。学年別にみると、2年、3年、4年と履修希望が示えている。男女別では、男子の方が履修希望が多い。

③ 体育理論・保健理論に対する評価
 体育理論に対する評価は、その内容が「生活に役立つ、ていない」とする学生が、全体で115名・39.7% (N=287) であり、「役立つ、ている」とする学生は、13名・4.5% (N=287) である。

学年別にみると、2年、3年、4年と「役立つ、ていない」とする率が上昇し、男女別では、男子の方が「役立つ、ていない」とする学生が多い。

保健理論についても、その内容が「生活に役立つ、ていない」とする学生が112名・38.6% (N=293) であり、「役立つ、ている」とする学生は、21名・7.2% (N=293) である。

学年別にみると、3年生が「役立つ、ていない」とする学生の率が最も高い。男女別では男子の方が、体育理論と同様、「役立つ、てい

ない」とする学生が多い。

B：大学におけるスポーツ活動に対する態度
大学内での運動施設利用については、「できる」と回答した学生のうち、「借用手続の具体的記入項目」で「詳しく知らない」と回答した学生が、40名・27.0% (N=148) である。

大学での休憩時間に「身体活動」を行っている学生は、3名・1.0% (N=315) である。

運動部・同好会・学外スポーツクラブなどに所属している学生の練習の時間帯は、平日の夕方、38名・23.6% (N=161) に集中しているようである。

5.) 大学保健体育に対する要望・意見

「現在または、今後の体育実技に最も期待する事」には、全体で「運動不足解消」が、136名・40.0% (N=340) で第1位であり、次に「楽しさ・おもしろさ」が118名・34.7% (N=340) で第2位である。

「今後の大学体育（実技・理論）への要望」では、「授業内容・時間帯」が66名・33.0% (N=200)

であり、「種目」が58名・29.0% (N=200) で、この
2つに集中している。

学年別にみると、「種目」要望は2年が第1
位。「授業内容・時間帯」要望は3年が第
1位である。

男女別でみると、男子は、「授業内容・時
間帯」が41名・37.6% (N=109) 要望の中心であり、
女子では、「種目」が34名・37.8% (N=90) で要望の
中心になっている。

以上が、質問紙法による調査票の調査項目
を5つの視点からみた結果ならびに考察であ
る。

体育実技実施方法の補足として、履修した
クラスの編成をみると、A・E大学は、男女別
編成であり、C・D・F大学では、混成である。
B大学は、女子大学である関係から、女子の
みの編成である。

体力・運動能力測定においては、体育実
技の授業との組み合わせで必ず実施している
大学は、C大学のみである。

D大学でも、体育実技との組み合わせではないが、毎年1回実施されている。

健康管理の面から、タバコについての問では、「吸ってない」と回答した学生の学年別推移をみると、学年があがるとつれて低い率を示している。

男女別をみると、喫煙者は、男子の約70%、女子の約20%であり、全体では、174名・41.9% (N=415) が喫煙している。

表13. 学年別・男女別がタバコを吸っていない学生 全体で「吸って

学年別	吸ってない		計	
	実数	%	実数	%
1	51	67.1	76	100.0
2	120	60.3	199	100.0
3	46	54.1	85	100.0
4	23	43.4	53	100.0
男	60	31.9	188	100.0
女	181	80.1	226	100.0

ない」学生は、241名・58.1% (N=415) であり、今回の対象者は比較的タバコを吸って

いる学生が少ない。

健康診断については、体育実技と組み合わせで、健康診断を行っている大学は、B・Cの2校である。他の9大学では、健康診断は毎年行なわれているが、健康診断受診と体育実

技授業との直接の配慮は打されていない。

表 14. 学年別・男女別・健康診断

	受診した		受診していない		計	
	実数	%	実数	%	実数	%
1	70	95.9	3	4.1	73	100.0
2	167	84.8	30	15.2	197	100.0
3	36	42.4	49	57.6	85	100.0
4	36	67.9	17	32.1	53	100.0
男	128	69.2	57	30.8	185	100.0
女	181	80.8	43	19.2	224	100.0

学年別にみると、その率は、1年が第一位、2年、3年とその率が下がり4年になると再び率が上昇する。これは、1年次は、「強制」と考えて受診しているが、ほとんどの学生が体育実技を終了した3年次には、最も無関心になる。4年次には、就職との関連でその率が上がっているものと考えられる。

男女別では、女子の方が受診した学生が多い。

以上の、体育実技クラス編成、体力・運動能力測定、タバコについて、健康診断などが質問紙法による5つの視点からの結果ならびに考察の補足である。

ここでの結果と考察で、学部ごとの比較が
わかりかであるのは、対象とした大学と学部が
ほとんど重なっていたため学部による差があ
らわからなかったことによるものである。

これは、抽出方法の問題であり、今後の課
題であるといえる。と同時に、抽出方法の問
題をふまえた総合的な考察が必要となる。

第2節 感想文による分析

(1.) 感想文を用いるに至る背景

質問紙法調査票(今回の調査から)に対する態度として、具体項目記入欄への記入程度が、調査への協力度のひとつとして考えられる。

このことは、質問項目の質や量とも関連のある問題であるが、調査に対する協力度のひとつとして考えることはできる。

今回の調査による、問22A、問38C、問38L、問43B、問46などの具体項目記入欄での無記、不明の出現率は、以下の通りである。

	実数	%	計
問22A	119	48.8	244(100.0)
問38C	72	20.6	349(100.0)
問38L	79	49.1	161(100.0)
問43B	68	56.2	121(100.0)
問46	215	63.4	339(100.0)

表15. 具体項目記入欄・無記・不明の出現率

以上の結果から、対象者の「なまの声」を聞き出す困難さが、質問紙法による調査では残存。レポート及び感想文では、量の多少は

あるが、無記という可能性はきわめて低い。

荒井貞光（広島大学）によれば

A：「キャリアパターン」の比較研究」について

B：作業方法に関する考え

「アンケート」と「ドキュメント」のどちら
 らが有利か

G.W. オルポート「心理学における個人的
 記録の利用法」から、「時系列的なドキュメン
 トにおいては、パーソナリティにおける発
 展と変化の経過、つまり自我がはじめ何を要
 求し、その欲望をどのようにふくらませてい
 くのか、連続的な段階において世界をどのよ
 うにながめていのかを観察することかでき
 る。長期間にわたる成長の研究の最近の試み
 を除けば、このようなドキュメントは、何年
 もの期間にわたる発展の経過⁸⁾をたどっていく
 手持りの唯一の方法である。」と「ドキュメン
 ト」の有効性を指示している。

C : 才法

(1.) A大学ニ部体育実技ニ一ズニコース
スポーツハイキニブの授業終了時に
提出スルニ感想文

対象 : 昭和51年 男子41名 . 女子20名
昭和52年 男子42名 . 女子19名

(2.) A大学ニ部体育実技通年種目

体操の授業終了時に提出スルニ感想文
対象 : 昭和51年 男子19名 . 女子2名

(3.) 次のようなレポートを得る

“スポーツハイキニブ”感想文

昭和51年9月6日 . M.U.(男子)

最初に当地に着いてびっくりしたことは、
驚く程の自然に囲まれていることでした。私
は以前からスポーツに親しみを持ち、それに
より全ての人間性を高め、そのためにはいかに
なる苦しみにも耐え抜き、今でいうスポ根男
(スポーツ根性を有する男)として生きてき
ました。しかし、ここへ来て感じたことは、
それではいけないのではないかということ

す。私はうまくてこのかた、こんなに楽しい
スポーツをしたことはありません。それは、
スポーツを好きな人達が自分のやりたいよう
に、自発的にスポーツをしているからではな
いかと思います。思えば、今まで私がやって
きたスポーツは、全て上から与えられたもの
です。しかも苦しいだけのものだったようで
す。たとえ一日、10時間も体を動かしても、
あとに残るのは疲労と疑問だけです。試合に
勝つことは確かにうれしいのですか、何かが
欠けていたような気がしてやみません。しか
し、ここには全てがありました。いいようの
ない親しみと連帯感。そして主体が自分であ
るということの喜び。全て私が、朝から晩ま
で、それを食欲のなくなる程にまで体を動
かしても得られなかったものです。ここでの
生活は、必ず私のこれから的人生に大きく役
立つと思います。とにかくやっていた楽しみ
のないスポーツなど、何の意味もないもので
はないでしょうか。その意味でくるみクラブ、

(スポーツハイキングの授業は、A大学のラグビー同好会である。くすみクラブの蔵王クラブハウスを利用して行なっている)の在り方というのは、大変素晴らしいものだと思います。私がここで望むことは、くすみクラブがその信念を持ち続けて、いつまでも日本の社会の悪い慣習を打ち破っていかれることです。最後に、カウンセラーの方々、先生方、大変お世話になりました。

(4) 現時点における学校体育とスポーツに対する態度を好意的か非好意的かで判断する。授業終了時の感想文である以上、今回の授業についての感想、大学保健体育についての感想が中心となる。また、スポーツに対する態度に関しても表示のないものがある。

上述の感想文は、今回の授業に対しては好意的であるが、スポーツ(特に運動部経験)に対しては非好意的であると判断する。

「判断の基準は、①直接表示されている。
 ②全体から推察される。③わからない。
 であり①の規準だけをとリ、他は?とし
 て処理したが、②の扱いの問題が残る。

(5.) レポート中にでてくるセニテニス^スを簡
 略化し(1セニテニスに2つ以上の場合
 もある)カテゴリーに区分する。その際
 レポーターが、〇〇のために、〇〇のお
 かげで感謝しているという表示をしてい
 るか否かで、+評価、-評価(表示なし
 も含む)へ入れ、単に経験・事実だけを
 書いているが明らかに前後のフブリから
 も好意的であると判断できる要因を?評
 価としてカテゴリーライズした。」

(感想文による分析)

表16 51年度 スポーツハイキニフ

スポーツ \ 体育	好意的	?	非好意的	ROW
好意的	5	7		12
?	10	19		29
非好意的	10	9	1	20
COLUMN	25	35	1	61

注: 実数

表17 52年度 スポーツハイキニフ

スポーツ \ 体育	好意的	?	非好意的	ROW
好意的	2	4		6
?	8	3	1	12
非好意的	10	29	4	43
COLUMN	20	36	5	61

注: 実数

表18 51年度 体操

スポーツ \ 体育	好意的	?	非好意的	ROW
好意的	3	4	2	9
?	4	3	1	8
非好意的	1	1		2
COLUMN	8	8	3	19

注: 実数

表 19. (感想文による分析)
具体的表現

		好意的	?	非好意的
51年度 スポーツハイキング	体育	友人かできた (13) 指導者の人から (9) (楽しむスポーツ経験 環境(自然や施設) (4) 規律ある生活	交友の場 (5) (楽しい内容 環境(自然や施設) (3)	授業だからかたない (1)
	スポーツ	中高でクラブ経験 (6) 昔から好きだった (5) 毎日ランニングをやっている (2)	少しでも運動するよう (9) 心がけている スポーツは楽しいもの (2)	表示なし (17) マラソンが嫌い (2)
52年度 スポーツハイキング	体育	指導者の人から (8) 友人の広がり (7) 楽しいムート (6)	(楽しいムート (5) 友人の広がり (環境 運動後のシャワー (3)	表示なし (2) (出席してはよかった (1) やると終わった
	スポーツ	楽しかった (2)	クラブ所属 (2)	表示なし (28) (やらないことから 恐怖感 (5) マラソンが嫌い
51年度 体操	体育	指導者の考えや熱意がわかった (6) (友人の広がり (楽しい授業内容 (2)	全出席かできた (2)	表示なし (夜の体育は苦痛 (1) 種目がきらい
	スポーツ	スポーツを実践している (4) スポーツが好き (2)	運動や健康に 容易だった (2)	表示なし (2)

()内は、実数

D : 結果と考察

51年度・スポーツハイキングの感想文では、全体的に体育にもスポーツにも何となく好意的とする学生が多い。体育とスポーツを比較すると、体育には好意的であるが、スポーツには非好意的な態度がうかがえる。しかし、スポーツに対する態度では、授業終了時の感想文ということもあって「表示なし」の数が多い。

次に具体的内容をみると、体育では「友人」「指導者」に影響を受けている。?評価でも「交友の場」としての機能を果たしている。

マンモス大学といわれるA大学、しかも二部の学生だけに友人志向が強いと考えられる。非好意的態度としては、「授業だからしかたない」とする受身的態度がみられる。

スポーツの内容では、「中・高でクラブ経験」のある学生、「昔から好きだった」学生が、現在の体育やスポーツ活動にも好意的な態度を示している。

体育に対しても、スポーツに対しても、
「楽しい場」であることを学生は望んでいる。
昭和52年度のスポーツハイキープの感想文
においても51年度同様、「指導者の人から」
と「友人の広がり」が、体育に好意的態度を
示す学生の背景となっている。「楽しいムー
ド」の授業内容であることも、重要な要素で
あり。体育とスポーツの比較では、「表示な
し」の数が28とスポーツに対して一評価が多
すぎるので、数での比較は難しい。

体育に対する？評価で、「運動後のシャワ
ー」が支持されているが、これは朝夕2回の
風呂の他に、汗をかいたらいつでも使える風
呂が、学生のために開放されているためであ
ると考えられる。

スポーツに対する非好意的態度として、
「スポーツをやったないことからくる恐怖感」
があげられているが、これは高校卒業後運動
らしい運動をしていない学生が、一部、学生
にはかなりいるようである。感想文全体から

運動する機会がないとする意見が多い。

「マラソンが嫌いだ」ということから、スポーツに対して非好意的である態度を示している学生がいる。マラソンのような長い距離を走ることが学生には特に苦痛のようである。しかし、実際にこれらの授業で走ってみると「身持ちがよかった」とする学生もあらわれている。

週に1度、校舎の屋上で実施されている体操の感想文では、体育に対して特に指導者の熱意や取り組み方が学生にも理解されていることがわかる。

ここでもスポーツハイキープと同様に、「友人の広がり」もあがっているが、それ以上に「指導者」の態度が、効果をあげている。体育に対して非好意的な学生の中に、「夜の体育は苦痛である」とする意見がでていたが、スポーツハイキープなどと比べて、通年種目の体操では、東京の生活の中での体育実技ということもあって、時間的リ制約が疲労

との関連で、批判されている原因である。

スポーツに対する態度としては、「実践」
している学生、「スポーツが好き」な学生が
大学のスポーツ活動にも好意的な態度を示
している。

第3節 レポートによる分析

本研究の中で、質問紙法による調査結果についていろいろな角度からの分析を試みた。どの様な質問紙法に於ても現われる傾向として、具体的項目記入欄には対象者が非協力的である傾向が強い。これは、質問項目数の多少にも影響があるに違いないが、質問紙法による調査の一つの限界であるということもできる。今回の調査に於てもその傾向は顕著である。対象者が何を考え、何を感じているのか、できる限りなまの声を知りたいと考えるときは、社会調査の本音とあるところである。そこで本研究に於ては、A大学=部体育実技シリーズ=コース=スポーツハイキープの準備教育(授業開始にあたって、班編成、グラウンドを使ったのラニング等を行なう)の時間に調査したレポートを用いて、大学保健体育の現状を把握しようと試みた。

A.<方法>

ここでは、川喜田二郎氏の創案による、

ＫＪ法（kawakita Jiro のイニシアールをとったもの）を用いて、各自のレポートから（なまデータ）として「紙きり」に書きそめを集めて、トラニフのようにシェイフして配布し、同じものを集めながら整理し、統合して行く創造的発想作業であるＴＫＪ法（トラニフ式ＫＪ法）によって分析した。

しかし、ここで問題となるのは、理論的には、ＴＫＪは一人でも可能であるが、一人の発想は多くの危険も同時に持っているということである。理想としては、６～７人のグループが最適である。今回の作業については、集取したレポート全てに一人で整理を行なった。客観性という点については、多少問題が残る。

次に、ＴＫＪ法による分析の簡単な手順を説明する。

「１）現状を把握すること。この発想の出発点であること。そのために「なまデータ」づくりとして、体験した情景、おなわち、

「写生」した文字が必要である。こうあるべきだというような表現の文章は、できる限り除く。

2.) 「なまデータ」をシェイクして、「グループピング」(生データの中の同じ又は似かよっている情景のものをまとめて、フリップで止める。)

どうしてもグループピングできないものは、そのままにして残しておく。

3.) グループピングによって“山”になった中身のデータの示す情景をぬますことなく、ピッタリと表現する文章をつける「表札づけ」を行なう。

4.) グループピングされた“山”が7つ以上残った場合にのみ、全ての山を場に出して、“因果関係”の最も深いものを選び、グループピングする。

5.) 5～6の山と一匹狼と呼ばれる単独のラベルとの相互の関係を考え、それからの因果のからみ合い、一方的因果関係(→)。

相互規定的関係(\leftrightarrow)、相反関係(\rightrightarrows)、因果のからみ合いは、明白ではないか、ほとんどなく関連のあるもの(—)、(……)等を考え、線と矢印をつか、てその太さも加減しながら図示することによって各部分情況間の相互関係を考え、全体情況の構造を考えた配置図を考える。

6.) でき上がった最終案とうりに模造紙にラベルを貼りつけて行き、全体の因果構造を図示する。

7.) 図解が完成したら「この図解は何をいっているのか」から「この図解はこういっている」というと⁽¹⁷⁾こ_こまで煮つめて文章を書き上げていく。」

8.) 1~7にいたった過程とそれそれのラベルに書かれた文章から、丸学保健体育の現状について考察する。

以上の手順に基づいて、今回の分析を行なった。

B. <結果と考察>

T K J法による分析では①大学保健体育に
 対する好意的意見、非好意的意見、②小学校
 以来の学校体育に対する好意的意見、非好意
 的意見、③運動経験に対する好意的意見、非
 好意的意見、④スポーツ活動の4つに分類さ
 れた。

①②③については、相反する傾向を示して
 いる。

①大学保健体育

好意的意見として、きびしすぎない授業内
 容、他の授業にない連帯感や親しみ、指導者
 の人から考え方、体育を通じてのクラス以
 外の学生との交流、運動不足の解消、必修教
 科なのでガムシヤラに出席などがあがって
 いる。

それに対して非好意的意見としては、小学
 校からの体育と何らかわ、たとはいるかない、
 施設が離れているので往復に時間がかかり、
 体育館がないので雨がふると休講になる、形

式的で遊びの要素が多く、現状ならば選択にした方がよい、狭いスペースの屋上やシャワー施設もない体育では爽快感がない、二部は時間と場所に恵まれていない、高校の様にいろいろな種目をやりたい、レクリエーション的授業内容で翌日に疲労が残らない程度の運動量を希望、種目数が少なく特に女性は不満などさまざまの不満が上がっている。大学保健体育においては、非好意的態度を示している学生の数が、なおかであるが多い。

② 小学校以来の学校体育との関連

好意的態度を示している学生は、小学校から体育が好きで、球技大会などには積極的に参加しているようである。

非好意的な態度を示している学生は、生まれて運動おんちで、体育の時間にできなかつたことがあって、仲間にあわれた経験を持っている学生や、男女別クラスになつてダンスばかりの授業がいやになつた女子学生、年令とともに体育が嫌いになつた学生などがその

原因である。

③ 運動部経験

運動部経験について好意的な学生は、人間関係をづくり、肉体的精神的にも役立ったとある意見を出している。ときになぐら水の経験なども持っているが、今ではよい思い出になっているとしている。

非好意的な学生は、学校体育と同様、体格や外見だけで判断したり、きびしすぎる教師に対しての反感、しごきや経済的理由などをあげている。

運動部経験に関しては、規律の中での生活に対して、封建的なところがある、と良かったとする学生と良くないとする学生に分けられる。これは、個人の価値観、個人をとりまく環境や背景などとの関連もあり、文章だけでは判断できない問題である。ここでは、二つに分かれる要因について、個人の過去の体験(社会化)との関連を中心に考察を行なう。

レポートによる分析を、好意的(+評価) 全体的に好意的(?評価) 非好意的(-評価) によってまとめた表が、表20である。

表20 レポートによる分析(+、?、-評価)と(人数)

項目	番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	計
①	大学体育	+	+	+	+	?	?	?	?	-	-	-	-	-	-	
②	小学校以来の学校体育	+	-	-	-	+	+	-	-	-	?	+	+	-	-	
③	スポーツクラブ経験	+	+	-	?	+	?	+	-	-	-	-	+	+	?	
	人数	3	4	7	2	1	1	2	3	10	1	4	4	7	1	50

①大学体育②小学校以来の学校体育③スポーツ・クラブ経験の関連からみた結果では、①②③の全てに-評価をしている学生が10名(20.0%)で第一位である。つまり全体の20%の学生が全てに非好意的な態度を示している。

次に、①大学体育に好意的で②小学校以来の学校体育、③スポーツ・クラブ経験に対して非好意的である学生が、7名(14.0%)である。

③スポーツ・クラブ経験が役に立たないとする学生は、②学校体育、①大学体育に対して

非好意的である。7名(14.0%)。

	好意的	?	非好意的	合計
大学体育	16 (32.0)	7 (14.0)	27 (54.0)	50
小学校以来の 学校体育	13 (26.0)	1 (2.0)	36 (72.0)	50
スポーツクラブ経験	21 (42.0)	4 (8.0)	25 (50.0)	50
合計	50 (33.3)	12 (8.0)	88 (58.7)	150

(表21) (レポートによる分析。(人数)(%))

レポートによる分析結果では、大学体育、小学校以来の学校体育、スポーツ・クラブ経験の全てに非好意的である。スポーツ・クラブ経験の項目では、21名(42.0%)が好意的、25名(50.0%)が非好意的とほぼ2つに分かれた。その内容については、すでにふれたが、スポーツ・クラブ経験者が好意的、非好意的態度に二分される傾向は、感想文による、調査結果にもあらわれている。

TKJ法による分析では、学生がどの様な意見を持っているか、そのおまの声を大切にすることを目的とした。それは、質問紙法による調査のみでは、具体的な意見がききだせ

ないからである。そしてその最終目標とする
ところは、体育実技では、現場にどの様なか
たちで反映されるかということである。

第4節 質問紙法と感想文・レポートの比較

ここでは、一部を中心に行なった質問紙法と二部を対象に行なった感想文・レポート調査の比較をする。

質問紙法による調査では、一部348名、二部67名と実数による比較は難しい。

先述の調査項目についての百分率の比較では、定職を有している学生15名(100%)が、二部の学生であることと、タバコを吸っていない学生の率が、一部(65.2%)と二部(23.9%)で違いが顕著な他は、ほとんど差はみられない。

しかし、感想文及びレポートによる調査では、いくつか一部と二部の違いがみられる。

体育実技実施方法では、種目に対して二部では一部以上に制約があり、不満の声が多い。特に女子に於て、その傾向が強い。

施設についても、施設までの往復時間の問題、授業内容については、夜ということもあり翌日に疲労の残らない程度の運動量を希望している。一部の学生は、運動量についての

不満はあげていない。

二部と一部との比較で最も顕著な傾向は、体育実技に対する期待や要望に於て、友人の広がりを見第一位にあげていることである。これは、大学での生活が夜であることから、学友とのすれ違いがあることに原因していると考えられる。

今回の調査では、定職を持って昼働いている学生は多くはないが、夜の大学生生活には時間的な制約がかなり大きな障害となり、体育実技にもその影響がでているといえる。

第4章 分析方法からの結果と考察

第1節 「構造-機能」分析

ここでは、「構造-機能」分析から3つの調査による結果を総合的に考察する。

① 体育実技履修種目満足度について、履修人数の多少による影響はみられなかった。これは、履修種目がバレーボールやバスケットボールなどのポピュラーな種目にかたよっているためであるといえる。種目に対してレポートから、「大学にしかない種目」や「いろいろな種目を履修したい」とする意見もみられる。女子に於て、種目への不満が強いのは、共学の大学で配慮が不足しているのではないかと考えられる。

② 体育実技クラスの編成については、履修回数、満足度、種目の満足度などとの関連はみられない。レポートでは、高校までの男女別授業に批判的で、男女混成を希望する学生もみられる。

③体育実技必修制度には、好意的であるといえる。しかし、レポートによる分析では、種目、回数、友人の広がりなどを総合すると現状に不満を持っている学生の割合が多かであるが、多いことから、体育実技の多方面から検討された改善が、必要である。

④体育実技は学生の健康の維持増進をはかる機能を有している以上、健康診断と組み合わせ実施をしなければならぬ。今回の調査では、2校が組み合わせ実施しているけれども、他の4校では配慮されていない。体育実技では、健康診断は切り離せない重要な要素であるので、今後実施していない大学の配慮が望まれる。

⑤保健・体育理論については、生活とのかかわりから調査を行なったが、現状ではほとんど内容が生活に役立っていないとある学生が多い。

⑥身体活動との関連からみると、体育実技は学生の「運動不足解消」に機能しているも

のの身体活動実践に充分機能しているとはいえない。大学の運動施設の使用においても、授業以外での利用度は低いし、学生のためにプログラムを用意している大学も少ない。

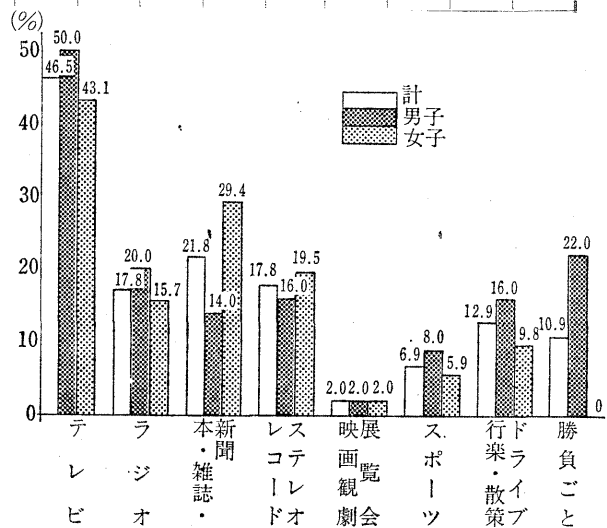
又、運動不足を感じながらも、身体活動を始めていない学生のほとんどは、「時間が無い」をその理由の第1にあげている。つまり、身体活動を行ないたくても時間的余裕が無いということである。

この問題は、大学生の生活様式と大きく関連しているように思われる。大学生は、平日、土曜、日曜をどの様にして過ごしているかという問題である。先述した「九州体育社会学研究会(1967)の調査報告によれば、平日の自由時間の使い方として、男女共にテレビ、ラジオ中心であり、休日に於ても平日と何ら変化がない²⁷⁾」これは、昭和51年の「大学生が休日¹⁹⁾の自由時間に30分以上続けた余暇」の調査結果と対応している。

昭和29年の大学生「最もしばしば行なわれる遊び」では、市部、村部共に野球を中心とした身体活動が上位をしめていた。

表 22. 最もしばしば行われる遊び (昭和29年大学生)

市 部				村 部			
順位	種 類	数		順位	種 類	数	
1	読 書	38		1	読 書	35	
2	野 球	21		2	野 球	29	
3	テニス	13		3	映 画	20	
4	卓球	11		4	ピクニック	10	
5	映 画	10		5	球技	9	
6	スポーツ	10		6	バスケット	9	
7	麻雀	7		7	パチンコ	7	
8	雑 談	7		8	音楽	7	
9	カッチボール	6		9	パビリオン	5	
10	カッチボール	6		10	音楽	5	
11	カッチボール	5		11	音楽	5	
12	カッチボール	5		12	音楽	5	
13	音 写	4		13	音楽	4	
14	音 写	4		14	音楽	4	
15	将 棋	3		15	音楽	3	



資料出所 財団法人日本能率協会「ヤングマーケット実態調査」(昭和51年)

資料出所 中央青少年問題協議会「青少年の遊びの調査」(昭和29年)

31.) 図 2. 大学生が休日の自由時間に30分以上続けた余暇 (昭和51年)

51年の結果では、スポーツ活動は、男(8.0%)女(5.9%)計(6.9%)とスポーツ活動に關する限り低下しているといえる。これは、この20年間のマス・メディアの発達やいつでも自由に遊ぶことのできる広場などの環境の減少などに影響を受けていると考えられる。大学生の身体活動を考える時、現状の実施

方法では、また不十分であり学生自身の意識も低いといえる。しかしながら、同好会などのサークル活動がさかんになり、しかも大学をとわす所為している新しい傾向があらわれてきた。

このような中で、大学の施設が十分な機能を果たしていない現状の改善が、今後の課題である。

本研究のゆらいとした体育実技の身体活動実践への影響についても、「構造-機能」分析で明らかになったままのままな問題との関連で考えていかなければならない。

第2節 「スポーツの社会化」からみた分析

A: クロス集計からの分析

質問紙法による調査結果から「スポーツの社会化」を明らかにするために、中学・高校での運動部経験とのクロス分析を行った。

表23 中学・高校の運動部経験と体育実技回数満足度

	運動部経験	ちょうどよい		多い		少ない		計	
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
中学	ある	217	69.3	8	2.6	88	28.1	313	100.0
	ない	57	64.8	2	2.3	29	32.9	88	100.0
高校	ある	149	65.6	5	2.2	73	32.2	227	100.0
	ない	122	70.5	5	2.9	46	26.6	173	100.0

中学時代の経験者は、「少ない」とする率で、なおかに未経験者より低い値を示すが、高校時代の経験者は、逆に「少ない」とする率が未経験者より上回っている。

しかし、 χ^2 検定を行った結果では、中学と高校には有意差はみられない。

表24 中学高校の運動部経験と大学での体育実技好嫌

運動部経験	非常に好き		好きなの		普通		嫌いな		大嫌い		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
中学	48	15.1	136	42.8	105	33.0	22	6.9	7	2.2	318	100.0
高校	43	18.5	101	43.5	70	30.2	13	5.6	5	2.2	232	100.0

大学の体育実技に対する態度を5段階評価した表が表24である。中学・高校の運動部経験者は、共に大学体育実技に好意的である。

以上のことから、中学・高校時代に運動部にはいっていた学生は、その後の身体活動にも積極的である。χ²検定では有意差はない。

次に、小学校・中学校・高校のそれぞれの時代の体育実技好嫌と大学体育実技好嫌とのクロス分析では、以下のような結果が得られた。

表 25 小学校の体育実技好嫌と大学体育実技好嫌

		大学体育実技好嫌					計
		大好き	好き	普通	嫌い	大嫌い	
小学校 実技好嫌	大好き	42	60	37	6	2	147
	好き	8	58	30	4	0	100
	普通	6	21	55	8	0	90
	嫌い	2	19	17	14	2	54
	大嫌い	2	5	6	4	5	22
	計	60	163	145	36	9	413

小学校時代に体育実技に好意的であった学生は、大学時代の体育実技にも好意的である。χ²検定では、有意差はない。

中学時代、高校時代も小学校時代と同様、

大学の体育実技にも、好意的な態度を示している。

表26 中学体育実技好嫌と大学体育実技好嫌

		大学体育実技好嫌					計
		大好き	好き	普通	嫌い	大嫌い	
中学 実技 好嫌	大好き	44	51	18	4	2	119
	好き	10	80	46	6	0	142
	普通	6	22	62	11	2	103
	嫌い	0	7	19	12	0	38
	大嫌い	0	3	0	3	5	11
	計	60	163	145	36	9	413

表27 高校体育実技好嫌と大学体育実技好嫌

		大学体育実技好嫌					計
		大好き	好き	普通	嫌い	大嫌い	
高校 実技 好嫌	大好き	10	92	45	7	0	154
	好き		20	78	10		108
	普通		5	10	16		31
	嫌い		1	1	2		4
	大嫌い		1				1
	計	10	119	134	35	0	298

中学時代と高校時代のそれぞれの χ^2 検定では、中学・高校ともに有意差はない。

次に小学校・中学校・高校時代の体育実技好嫌と、大学体育実技必修制度とのクロス分析を行なった。

表 28. 体育実技必修賛成者の中・高体育実技好嫌

		体 育 実 技 好 嫌					
		大好き	好き	普通	嫌い	大嫌い	計
必修 賛成	小	104(40.3)	60(23.3)	51(19.8)	33(12.8)	10(3.9)	258(100.0)
	中	82(31.8)	95(36.8)	57(22.1)	21(8.1)	3(1.2)	258(100.0)
	高	79(30.7)	105(40.9)	58(22.6)	13(5.1)	2(0.8)	257(100.0)

注：()は%

小学校・中学校・高校時代において体育実技に好意的な態度を示していた学生は、大学体育実技必修に対して好意的である。

表 29. 体育実技必修賛成理由と小・中・高体育実技好嫌

		体 育 実 技 好 嫌					
		大好き	好き	普通	嫌い	大嫌い	計
運動 不足 解消	小	43(35.8)	27(22.5)	25(20.8)	20(16.7)	5(4.2)	120(100.0)
	中	33(27.5)	41(34.2)	30(25.0)	14(11.7)	2(1.7)	120(100.0)
	高	56(58.9)	28(29.5)	9(9.5)	2(2.1)		95(100.0)

注：()は%

体育実技必修制度に対して好意的な態度を示した学生の理由「運動不足解消」とのクロス分析では、小学校・中学校・高校時代、体育実技に好意的な態度を示した学生が、大学体

育美技の必修賛成理由として「運動不足解消」を支持していることがわかる。小学校と中学校とを比較した χ^2 検定では2.5%で有意である。又小学校と高校、中学と高校との比較では、いずれも χ^2 検定値は有意差がない。

そして、修得後体育美技が選択教科としてあるかは、履修しなかったとの問には、小学校、中学校、高校いずれも「嫌い」、「普通」、「好き」において、「選択しない」が「選択あり」を上回っているが小学校、中学校、高

表 30. 修得後の体育美技履修と小・中・高の体育美技好嫌

		体 育 美 技 好 嫌					
		大好き	好き	普通	嫌い	大嫌い	計
修得後	(小学校)	39(47.0)	19(22.9)	14(16.9)	9(10.8)	2(2.4)	83(100.0)
	あり	23(24.5)	27(28.7)	19(20.2)	18(19.1)	7(7.4)	94(100.0)
体育美技	(中学校)	37(44.6)	29(34.9)	10(12.0)	6(7.2)	1(1.2)	83(100.0)
	あり	16(17.0)	33(35.1)	23(24.5)	18(19.1)	4(4.3)	94(100.0)
選択	(高校)	40(48.2)	31(37.3)	6(7.2)	5(6.0)	1(1.2)	83(100.0)
	あり	13(13.8)	34(36.2)	29(30.9)	14(14.9)	4(4.3)	94(100.0)

注:()は%

校のそれぞれに χ^2 検定を行なうと、いずれも有意差は現われていない。これらのことから

小学校・中学校・高校での体育実技好嫌は、
大学での単位修得後の学生の体育実技欲求に
は、影響してないといえる。

B: 感想文・レポートからの分析

感想文やレポートによる分析では、質問紙法による結果と同様、以前から好きで積極的な態度を示していた学生が、大学体育においても、身体活動の実践においても好意的である傾向を示している。換言するならば大学の学生の身体活動は、過去の個人の経験に大きく左右されている。誕生してから今日に至るまでの時間の中で、身体活動にかかわる様々な要因に影響を受けているということである。個人の環境として身近な、両親、兄弟、友人、教師などにかかわり合いながら社会化されてきた。では「どの様な要因で身体活動を実践しているのか」ということが問題になる。これが、現在の体育社会学の中心課題の一つとなっている問題であり、その要因についても今に明確な結論はたされていない。

本研究では、大学保健体育と身体活動実践との関連についての研究であるので、学生としての実態を把握することにととまり具体的

要因の追求までには、いたっていない。

C: 質問紙・感想文・レポートからの総合的な考察

① 中学・高校でクラブ経験のある学生は、大学においても、体育実技や学内・学外のクラブ所属にも積極的な態度をしめしている。

② 大学生の身体活動実践の状況として、その率は、全体の161名(38.8%)と決して高いとはいえない。

③ 身体活動を実践している学生の中で、クラブに所属している「参加動機」をみると、圧倒的に友人の紹介でクラブに所属し、身体活動を行なっている。大学生の身体活動への社会化の第一の要因は、「友人」であるといえる。

④ 身体活動を実践していない学生の理由のほとんどは、「時間が無い」ことである。この問題は、大学生の生活サイクルとの関連でとらえていく問題である。

⑤ 中学・高校でクラブ経験のある学生の運動

部に対する意見は、好意的、非好意的の二意見に二分される。さらに運動部に好意的な態度を示す学生は、大学体育実技に積極的な態度を示しなからも、実施方法やその他の内容、現状の体育実技には、不満が多いといえる。

⑥ 小学校以来の学校体育に対して非好意的な学生は、「自分は運動神経がにぶい」とか「皆の前で、一人だけできなくて恥ずかしい思いをした」となどの体験をしている。大学体育では、技術面について難しい指摘が多くない内容の授業がほとんどなので、大学体育実技には好意的な態度を示している。

⑦ 中学・高校の運動部経験に非好意的な学生は、「クラブでの厳しすぎる内容が不満である」としている。「和気あいあいとした楽しいムード」「連帯感や友人との交流」など、大学での体育実技には、運動部時代と違、た楽しさを感じている。

以上が、質問紙、感想文、レポートから、

「スポーツの社会化」によって分析した結果
と総合的な考察である。

第5章 結論

本研究のテーマである「体育実技と身体活動の実践」については、現時点では十分に機能しているとはいえない。

体育実技が、運動不足の解消に役立っているとしているのは、3・4年次の学生に多い。しかし、選択教科として3・4年次に組み入れることには、賛成者数は少ない。これは、決められた枠の中での身体活動を望んでいないことに原因している。さらに、同好会所属者のうち、他大学の同好会に所属している率が高いことから、裏づけられる。これは、閉鎖的といわれる運動部から開放的な同好会への志向と同様に、開放的な体育実技を望む方向に向かってきたといえる。単位修得後であれば、授業としてよりも、大学のスポーツ施設が学生のために解放されることを望んでいる。その良い例が対象とした国立D大学である。D大学では、体育実技にも積極的な態度を示し、授業以外でも利用できる施設があり、その利

用度は90%以上である。

施設に関して同好会などでは、学内施設が使用できない場合、学外施設(主に公共施設)を利用している。ここでは、自分たちで場所を捜し確保するという積極的な態度があらわれている。

学生の運動欲求を満足させるためには、ま

ち一日の生活時間の大部分を占める大学に於て、全ての学生を対象としたスポーツ施設の解放、そのためのプログラムなどが必要である。

また、大学生の身体活動の実践を考える時、過去の経験や事実との関連「社会化」による影響が大きいことや、身体活動の実践のための広場などの環境にも関連があることが明らかとなった。

しかし、本研究では現時点での実態の把握にとどまり、大学生の身体活動実践にどのような要因が影響を及ぼしているものかについての具体的な結果は、得ることができな

かった。

今後は、「構造-機能」分析についてさらに研究をすすめるとともに、「スポーツの社会化」による分析を行ない、体育実技が学生の身体活動の実践に及ぼす要因についての研究をすすめる。

第6章 要約

本研究は、

「大学保健体育の構造と機能に関する研究」
— 体育実技が学生の身体活動の実践に及ぼす
影響について — の研究である。

＜目的＞

本研究では、大学保健体育の構造として規定しに中から、正課体育の体育実技と大学生活における身体活動の実践との関連についてとらえようとする。

＜方法＞

- 1) 「構造-機能」分析
- 2) 「スポーツの社会化」による分析

＜手順＞

- 1) 質問紙法による調査
- 2) 感想文による調査
- 3) レポートによる調査

＜結果と考察＞

- 1) 「構造-機能」分析
- ① 体育実技と身体活動の実践との関連につ

いては、「運動不足解消」のためには機能しているが、身体活動実践には、十分に機能しているとはいえない。

② 大学生のスポーツクラブ所属では、他大学の同好会に所属して活動しているという新しい傾向があらわれている。

③ 学内施設などの環境と学生の態度との関連では、私立よりも環境的に恵まれている国立の学生の方が、体育実技に積極的にとり組み、授業以外の身体活動も、より実践している学生が多い。

④ 保健理論、体育理論の内容は、「生活に役立っていない」とされ、健康診断と体育実技との組み合わせなど、学生の健康の維持増進に、より以上の配慮が必要である。

⑤ 体育実技必修制度には、好意的であるが、実施方法、施設、内容、種目などの構造が不十分であり、学生の要望に忘れている。

2) 「スポーツの社会化」による分析

① 中学・高校で運動部経験があり、好意的

好態度を示している学生は、大学体育実技に対して積極的な態度を示しているが、その内容、方法、施設、種目などには不満を示している。

② 中学、高校の運動部経験に非好意的な学生は、大学での体育実技の内容や友人との交流など、運動部時代と違、た楽しさを感じている。

③ 小学校以来の学校体育に非好意的な学生は、ほとんどの学生が授業で恥をかかされた経験を持ち、技術面の追求だけの内容ではない大学の体育実技に好意的な態度を示している。

④ 大学生の身体活動の実践への社会化に、最も影響を与えているのは、友人である。

⑤ 身体活動を実践していない学生の理由は、「時間が無い」ことであり、この問題は、「大学生の余暇活動」からの分析が必要である。

〈今後の課題〉

本研究の目的とした、体育実技が学生の身体活動の実践に及ぼす影響については、現時点では十分に機能しているとはいえない。

本研究で明らかとなった大学保健体育の理念、組織などの構造の貧弱さなどの問題についても研究を行なうとともに、今後「スポーツの社会化」の観点からの研究もすすめる。

文献

- 1.) 荒井貞光 : キャリアパターン比較研究について(体育社会学専門分科会(於社)広島大学(1977))
- 2.) Bernard Gillet : HISTOIRE DV SPORT,
近藤 等訳 : スポーツの歴史, 9-20. 四版. 白水社 : 東京 (1967)
- 3.) Charles A. Bucher : Foundation of Physical Education.
江原慎四郎訳 : 体育の基礎理論, 第3版. 15. 体育科学社杏林書院 : 東京 (1969)
- 4.) Charles A. Bucher : Administrative Dimensions of Health and Physical Education Program including Athletics. 55-76 : N.Y. (1971)
- 5.) E.W. Nixon & F.W. Cozens : An Introduction to Physical Education.
大谷武一訳 : 体育序説, 6版. 8. 不昧堂 : 東京 (1967)
- 6.) 福田直, 日高六郎, 高橋徹 : 社会学辞典, 初版. 第1刷発行. 237-329. 有斐閣 : 東京 (1968)
- 7.) 藤原健固 : スポーツと社会化, 初版. 1-30, 道和書院 : 東京 (1976)
- 8.) G. W. Allport : キャリアパターン比較研究. 広島大学 (1977) より引用
- 9.) George H. Sage : Sports and American Society : Canada (1974)
- 10.) Gerald S. Kenyon : A Sociology Of Sport : On Becoming A Sub-Discipline.
: Canada (1974)
- 11.) 久松栄一郎 : 大学体育十年誌, 初版. 1-7. 大学体育協議会 : 東京 (1960)
- 12.) 平野出児 : 新制大学における正課体育. 文部時報. 第859号.
久松栄一郎 : 大学体育十年誌. 初版. 1. 大学体育協議会 : 東京 (1960) より引用
- 13.) 堀田 登 : 大学保健体育. 大学保健体育研究会編. 道和書院 : 東京 (1971)

- 14.) 生越 忠 : 水からの大学 第1刷 124-128. 朝日新聞社 : 東京 (1974)
- 15.) J. A. パーキンス : 大学の未来像 下城 勲・井門富士夫訳 16-39. 東大出版 : 東京 (1968)
- 16.) 神田 順治 : 大学体育概論 第3版 15-54. 国土社 : 東京 (1965)
- 17.) 川喜田 二郎 : KJ法ワークブック 講談社. TKJ法の形と. 順天堂大学より引用
- 18.) Kinichi Asano : The Scientific View of Sports, 205 : N.Y. (1972)
- 19.) 中村 誠 : 体育・スポーツに関する調査, 1-5. 大学体育調査研究会 (1976)
- 20.) Nixon & Jewett : An Introduction to Physical Education, 62-178 : U.S.A. (1969)
- 21.) 文部省大学局大学課 : 昭和52年度 全国大学一覽 財団法人文教協会 : 東京 (1977)
- 22.) 文部省 : 教育改革のための基本的施策 MEJ 80,047, 7刷. 163-175
大蔵省印刷局 : 東京 (1974)
- 23.) 前川 峯雄 : 戦後学校体育の研究 初版 317-374. 不昧堂出版 : 東京 (1973)
- 24.) 松井三雄編 : 教育・体育・スポーツ 第3版 162. 杏林書院 : 東京 (1975)
- 25.) 森 博 : 社会学的分析 第4刷 216-248. 恒星社厚生閣 : 東京 (1974)
- 26.) 日本社会学編集委員会編 : 現代社会学入門 集団と社会 第2版 21. 有斐閣
: 東京 (1977), 新井野洋一 : 大学生の健康管理に関する基礎的研究 順天堂大学修士論文
(1977)より引用
- 27.) 野口 博敏 : 大学における体育・スポーツの社会学的研究 1-67. 九州地区体育社会学研究会 (1967)
- 28.) 鈴木竹雄・田中二郎編 : 昭和51年版 小沢法 1刷 30-31. 有斐閣 : 東京 (1976)
- 29.) 鈴木正三 : 大学保健体育20年の歩み 1刷 89-126. 全国大学保健体育協議会 : 東京 (1973)
- 30.) 新堀通也編 : 日本の教育地図 «体育・スポーツ編» 初版 1-29. 帝国地政学会
: 東京 (1973)

- 31.) 総理府青少年対策本部編：青少年白書 昭和52年版 1刷 97-98 大蔵省印刷局
：東京(1977)
- 32.) 下中邦彦：哲学事典 初版 622 平凡社：東京(1971)
- 33.) 新村 出：広辞苑 第=版 1024
1329 岩波書店：東京(1969)
- 34.) T. Parsons : Essays in Sociological Theory chap II. (1949)
森 博：社会学的分析 第4刷 222-223 恒栄社厚生閣：東京(1974)から引用
- 35.) 竹之下休蔵：スポーツの社会学 スポーツ科学講座 14版 13 大修館書店：東京(1969)
- 36.) 竹之下休蔵：体育社会学 初版 1-64 大修館：東京(1972)
- 37.) 竹之下休蔵：ソレイ スポーツ・体育論 5版 115-156 大修館：東京(1972)

SUMMARY

This is a study on structure and function of "Health and physical education " as one of basic educational subjects.

Purpose; It is one of main purposes to clarify whether physical education practice is useful for students to perform physical activities.

Method; The analysis which was used in this study were done in the light of two aspects.

One of them is Structural-Functional Analysis and the other is Sport Socialization.

Consideration;

In a point of view of "Structural-Functional Analysis "

- 1) Physical education practice fulfill its function for cancellation on lack of exercise, but physical education practice is not useful for the performance of physical activity.

In a point of view of "Sport Socialization "

- 1) Socialization to the performance, which was each based physical activities of students, is affected by their friends.
- 2) Physical activities of students are affected by their experiences and facts of the past.

The author wants to study on performance of student's physical activity, which has main purpose of important factors that affect Structure and Function.

Seeing the problem of structural-functional analysis, futher more, the author continue to study of Sport-Socialization.

January 1978

Masaaki Mori

《大学生生活と体育に関する調査》

(52.9.)

＜調査の主旨とお願い＞

順天堂大学体育社会学研究室

この調査は、現在、大学で実施されている体育に対する皆様の考え方をお聞きして、今後の大学体育の参考資料にしたいと考えています。

本調査の結果は、学問研究以外には使用しませんので、御迷惑をおかけする事はありません。

どうぞありのままに記入して、調査に御協力下さい。

＜記入方法＞

(1) この調査票は、問1～問45で構成されています。

(2) 答えは、1. 2. 3. ……の数字の中から該当するもの1つを選んで○で解答し、必要項目には、問の指示にしたがってお答え下さい。

(3) () には、該当事項を具体的に記入して下さい。

(4) 下方の□□の中には、記入しないで下さい。

- 問1. 大 学 名 () 大学
- 問2. 学 部 1. 第1部(昼間部) } () 学部
2. 第2部(夜間部) }
- 問3. 学 年 1. 1年 2. 2年 3. 3年 4. 4年
- 問4. 性 別 1. 男 2. 女
- 問5. 年 令 満() 歳
- 問6. 定 職 1. 有- 仕事の内容()
2. 無
- 問7. アルバイト 1. 有- 仕事の内容()
2. 無
- 問8. 出身高校所在地 () 1. 都 2. 道 3. 府 4. 県
- 問9. 住 居 1. 自宅(親と同居)
2. アパート, 借家, 借室
3. 他世帯に同居
4. 寮
5. その他()

問1	問2 昼・夜	学部	問3	問4	問5	問6 (A)	内容	問7 (A)	内容	問8	問9
9	11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	31

問10. 中学, 高校時代の運動部経験

- 中学 1. 有-その種目() 2. 無
 高校 1. 有-その種目() 2. 無

問11. あなたが履修している(または履修した)種目名を書き, 履修した時の実技クラスの人数を下の表から選んで, 数字でお答え下さい。

※ () は, 宿泊を伴う種目

種目	人数	種目	人数
1 年次: ()-()	()	()-()	()
()-()	()	()-()	()
2 年次: ()-()	()	()-()	()
()-()	()	()-()	()
再履習修: ()-()	()	()-()	()
()-()	()	()-()	()

1. 30名以内	2. 30名~40名	3. 40名~50名
4. 50名~70名	5. 70名以上	6. その他()

問12. 種目の選択方法

1. 指定 2. 希望選択 3. その他()

<解答欄>
 問12 { 1年次 → ()
 2年次 → ()
 再履習修 → ()

問13. あなたが履修したクラスの編成

1. 男子のみ 2. 女子のみ 3. 男女混成

問13 { 1年次 → ()
 2年次 → ()
 再履習修 → ()

問14. あなたは, 履修した種目に満足していますか

1. 満足している 2. どちらともいえない 3. 満足していない

問14 { 1年次 → ()
 2年次 → ()
 再履習修 → ()

問15. 体育実技は週に何回ありますか

1. 週に1回 2. 週に2回 3. その他()

問16. 体育実技の回数について

1. ちょうどよい 2. 多い 3. 少ない 4. その他()

問10 (中学)	問10 (高校)	問11 (1年次)	問11 (2年次)	問11 (再履習修)	問12	問13	問14	問15	問16				
33	36	37	39	41	43	45	47	49	51	53	55	57	59

問 22. あなたの大学では、授業に関係なく運動施設を利用できますか。
 (例：6月～9月、プールが自由に使える)

1. できる→その期間、施設、借用手続きなど、具体的に記入して下さい。

S.Q.1

2. できない

問 23. 現在、体育実技は必修になっていますが、これについてどう思われますか

1. 必修に賛成

2. 必修に反対

3. どちらでもよい

4. その他()

S.Q.1 → <理由>

S.Q.2 → <理由>

1. 場所、時間、指導者を保証
2. 運動不足解消
3. 体育が好きだから
4. 健康に良い
5. クラス以外の友人ができる
6. その他()

1. 必修である必要性を感じない
2. 出席する事がめんどくさい
3. 体育が嫌い
4. 身体が丈夫ではないから
5. その他()

問 24. 大学では、必修、選択は別として体育実技はあった方が良いですか

1. あった方がよい
2. どちらでもよい
3. ない方がよい

問 25. あなたにとって体育実技は、他教科目と比べて好きな方ですか

1. 非常に好き
2. 好きな方
3. 普通
4. 嫌いな方
5. 大嫌い

問 26. 小学校、中学校、高校時代はどうでしたか

小学校： 1. 非常に好き 2. 好きな方 3. 普通 4. 嫌いな方 5. 大嫌い

中学校： 1. 非常に好き 2. 好きな方 3. 普通 4. 嫌いな方 5. 大嫌い

高校： 1. 非常に好き 2. 好きな方 3. 普通 4. 嫌いな方 5. 大嫌い

問 27. 問 25. 問 26. で、4. または 5. と答えた方、体育が嫌いな理由は何ですか

1. 先生が嫌いだった
2. 技術がへただった
3. 身体を動かす事が嫌いだった
4. 身体が丈夫ではなかった
5. その他()

問 22	S.Q.1	問 23	S.Q.1	S.Q.2	問 24	問 25	問 26 小	中	高	問 27
79	9	11	13	15	17	19	21	23	25	27

問28. あなたの大学では、体力測定や運動能力測定がありますか

- 1. 1年に1度必ずある
- 2. 時々ある
- 3. 全くない
- 4. その他()

→あなたは必ず参加しますか

S.Q.1

- 1. 必ず参加
- 2. 参加したりしなかったり
- 3. 不参加
- 4. その他()

→参加した人の中で2回以上測定した方は、以前と比べて記録はどうでしたか

S.Q.2

- 1. 向上した
- 2. かわっていなかった
- 3. 下がった
- 4. 種目によって上下があった
- 5. その他()

問29. 体育理論を履修した方で、授業内容が自分の生活に役立っていますか

- 1. 役立っている
- 2. どちらともいえない
- 3. 役立っていない
- 4. その他()

→具体例を上げて下さい

S.Q.1

()

問30. 保健理論を履修している方で、授業内容が自分の生活に役立っていますか

- 1. 役立っている
- 2. どちらともいえない
- 3. 役立っていない
- 4. その他()

→具体例を上げて下さい

S.Q.1

()

問31. あなたは、タバコを吸っていますか

- 1. 1日に10本以内
- 2. 1日に10本～20本
- 3. 1日に20本～40本
- 4. 吸わない
- 5. その他()

問32. 自分の健康とタバコについてどう思いますか

- 1. 健康に悪い
- 2. どちらともいえない
- 3. 健康には関係ない
- 4. その他()

問28 S.Q.1 S.Q.2 問29 S.Q.1 問30 S.Q.1 問31 問32

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

29 31 33 35 37 39 41 43 45

問 33. あなたは、今年の春の健康診断を受診しましたか

- | | |
|--|--|
| <p>1. はい <input type="checkbox"/></p> <p>S.Q.1</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 友人にさそわれて 2. 自分のために自主的に 3. 自分の健康に不安を感じた 4. なんとなく 5. 大学の保健施設からすすめられた 6. その他 () | <p>2. いいえ <input type="checkbox"/></p> <p>S.Q.2</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 知らなかった 2. 忘れていた 3. 都合が悪かった 4. めんどろだった 5. 健康上不安がなかった 6. 必要を感じなかった 7. その他 () |
|--|--|

問 34. 体育実技を履修してみて、日頃の運動不足を感じた事がありますか

- | | |
|--|--|
| <p>1. ある <input type="checkbox"/></p> <p>2. ない <input type="checkbox"/></p> <p>S.Q.1</p> <p>1. 始めた → どのような事ですか ()</p> <p>2. 始めていない <input type="checkbox"/></p> <p>S.Q.2</p> <p><理由></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 時間がない 2. 金がかかる 3. 体力がない | <p>3. どちらともいえない</p> <p>4. その他 ()</p> <p>運動不足を感じた方で、その後何か運動を始めましたか</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 身体が丈夫ではない 5. 運動する事が嫌い 6. その他 () |
|--|--|

問 35. 個人又は仲間で大学外のスポーツ施設を利用した事がありますか

- | | |
|--|--|
| <p>1. ある <input type="checkbox"/></p> <p>S.Q.1</p> <p>どの様な施設ですか</p> <p>具体的に答え下さい</p> <p>()</p> <p>S.Q.2</p> <p>その様な施設をどのくらい利用していますか</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 週に 1, 2 回 2. 月に 1, 2 回 3. 3 カ月に 1, 2 回 | <p>2. ない</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 6 カ月に 1, 2 回 5. 1 年に 1, 2 回 6. その他 () |
|--|--|

問 36. 大学外のスポーツ施設利用のあるなしにかかわらず、大学のスポーツ施設が手軽に利用できれば、利用したいと思いますか

- | | | |
|-------|--------------|---------|
| 1. 思う | 2. どちらともいえない | 3. 思わない |
|-------|--------------|---------|

問 33	S.Q.1	S.Q.2	問 34	S.Q.1	S.Q.2	問 35	S.Q.1	S.Q.2	問 36
47	49	51	53	55	57	59	61	63	65

問37. 現在、あなたは運動部か、スポーツ同好会に所属していますか

1. 運動部に所属 2. 所属していない 3. スポーツ同好会に所属

→ 主な練習場はどこですか ()には施設名をお書き下さい ← 主な練習場はどこですか

- | | |
|---|---|
| <p>S.Q.1</p> <p>1. 学内施設 ()</p> <p>2. 公共施設 ()</p> <p>3. 私营施設 ()</p> <p>4. その他 ()</p> | <p>S.Q.2</p> <p>1. 学内施設 ()</p> <p>2. 公共施設 ()</p> <p>3. 私营施設 ()</p> <p>4. その他 ()</p> |
|---|---|

問38. あなたは、大学外のスポーツクラブ(スポーツ同好会)に所属していますか

1. している 2. していない

S.Q.1 どの様なスポーツクラブですか ()には、名称、施設名をお書き下さい
 S.Q.2 その理由を具体的にお書き下さい

- ()
1. 他大学のスポーツ同好会の会員 ()
 2. 私立のテニスクラブ、スイミングクラブ、ダンス教室などの会員 ()
 3. 区立のテニスクラブ、スイミングクラブ、ダンス教室などの会員 ()
 4. 県立のテニスクラブ、スイミングクラブ、ダンス教室などの会員 ()
 5. 都立のテニスクラブ、スイミングクラブ、ダンス教室などの会員 ()
 6. 国立のテニスクラブ、スイミングクラブ、ダンス教室などの会員 ()
 7. 企業のテニスクラブ、スイミングクラブ、ダンス教室などの会員 ()
 8. その他 ()

S.Q.3 練習は主にいつしていますか (S.Q.3~S.Q.9は、大学外のスポーツクラブに所属している方もお答え下さい)

- (1) 平日 : 1. 午前中 2. 昼 3. 夕方
 (2) 土曜 : 1. 午前中 2. 昼 3. 夕方
 (3) 日曜・祭日 : 1. 午前中 2. 昼 3. 夕方

S.Q.4 参加するきっかけになったものをお答え下さい

1. 大学の授業
2. 友人の紹介
3. 新聞、雑誌等の掲載
4. その他 ()

問37	S.Q.1	S.Q.2	問38	S.Q.1	施設名	S.Q.2	S.Q.3 (1)	(2)	(3)	S.Q.4
11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	31

S.Q.5 年間会費は、どのくらいですか

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1. 無料 | 5. 10,000 円～ 30,000 円 |
| 2. 3,000 円以内 | 6. 30,000 円～ 50,000 円 |
| 3. 3,000 円～ 5,000 円 | 7. 50,000 円以上 |
| 4. 5,000 円～ 10,000 円 | 8. その他() |

S.Q.6 これからも続けたいと思っていますか

- | | |
|--------------|------------|
| 1. 続けたい | 3. 続けたくない |
| 2. どちらともいえない | 4. その他() |
| S.Q.7 <理由> | S.Q.8 <理由> |

() ()

S.Q.9 大学の授業と比較して、どの様な点が違いますか。

感じている事をありのままお答え下さい。

()

問 38. スポーツをすれば健康になるとよくいわれますが、体育実技を履修して、あなた自身はいかがですか

- | | |
|--------------|-------------|
| 1. 健康になった | 3. 健康には関係ない |
| 2. どちらともいえない | 4. その他() |

問 39. 大学で休憩時間(休講も含む)があると、あなたはどんな事に時間を使いますか

- | | |
|----------------|------------|
| 1. パチンコ, マージャン | 5. スポーツ |
| 2. 喫茶店 | 6. 図書館 |
| 3. 公園 | 7. 何となくすごす |
| 4. デパート | 8. その他() |

問 40. あなたが現在又は今後の体育実技に最も期待する事をお答え下さい

- | | |
|---------------|-----------------|
| 1. 運動不足解消 | 5. 指導者との人間的ふれ合い |
| 2. スポーツ技術修得向上 | 6. 楽しさ, おもしろさ |
| 3. 根性や精神の訓練 | 7. 何も期待していない |
| 4. 友人とのまじわり | 8. その他() |

S.Q.5 S.Q.6 S.Q.7 S.Q.8 S.Q.9 問 38 問 39 問 40

--	--	--	--	--	--	--	--

17 19 21 23 25 27 29 31

<体育実技の単位を修得した方におたずねします>

問 41. 履修した体育実技で、あなたはどの様な事を感じましたか

1. スポーツを日常生活にとり入れる事
2. 仲間を大切にする事
3. スポーツの楽しさ
4. 健康の維持増進
5. 何も感じない
6. その他()

問 42. 単位修得後から現在までに運動をする必要を感じましたか

1. 感じた
2. どちらともいえない
3. 感じない

→何か運動を始めましたか

S.Q.1

1. 始めた

→その内容を具体的にお答え下さい

S.Q.2

()

2. 始めない

→理.由>

S.Q.3

1. 金がない
2. 時間がない
3. 施設が身近にない
4. その他()

問 43. 体育実技履修次と比較して、現在のあなたのスポーツに対する興味はいかがですか

1. ふえている
2. どちらともいえない
3. へっている

問 44. 単位修得後に選択科目として体育実技があれば、あなたは修得しますか

1. 履修する
2. どちらともいえない
3. 履修しない

問 45. これからの大学体育(実技, 理論)に望む事を、どんな事でもけっこうですから書いて下さい

()

御協力ありがとうございました

問41 問42 S.Q.1 S.Q.2 S.Q.3 問43 問44 問45

--	--	--	--	--	--	--	--

33 35 37 39 41 43 45 47

。大学の保健体育のあり方について、あなたが履習した体育授業の良かった点、悪かった点、改善点など、何でも結構ですので書いて下さい。

。これまでの自分のスポーツ経験、小学校以来の学校体育との関連、このスポーツハイキングに期待するものなどについても書いて下さい。

第__班 氏名 _____ 学部名 _____ 学部 _____ 学年 _____

御協力ありがとうございます

		大 学 名						
		A	B	C	D	E	F	計
性別	男	94(44.4)		26(40.9)	31(72.1)	7(63.6)	30(100.0)	188(45.5)
	女	113(55.6)	57(100.0)	40(59.1)	11(27.9)	4(36.4)		225(54.5)
	計	207(100.0)	57(100.0)	66(100.0)	42(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	413(100.0)
学年	1	75(36.4)				1(9.1)		76(18.4)
	2	75(36.4)	57(100.0)	66(100.0)	1(2.4)			199(48.3)
	3	46(22.3)			17(40.5)	9(81.8)	13(43.3)	85(20.6)
	4	10(4.9)			24(57.1)	1(9.1)	17(56.7)	52(12.6)
	計	206(100.0)	57(100.0)	66(100.0)	42(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	412(100.0)
年令	18	16(7.8)				1(9.1)		17(4.1)
	19	53(25.7)	26(45.6)	14(21.2)				93(22.6)
	20	58(28.2)	26(45.6)	25(37.9)	2(4.8)	3(27.3)	3(10.0)	117(28.4)
	21	45(21.8)	5(8.8)	21(31.8)	15(35.7)	3(27.3)	5(16.7)	94(22.8)
	22	21(10.2)		6(9.1)	13(31.0)	3(27.3)	7(23.3)	50(12.1)
	23	1(0.5)			9(21.4)	1(9.1)	7(23.3)	18(4.4)
	24	1(0.5)			2(4.8)		4(13.3)	7(1.7)
	25~	1(0.5)			1(2.4)		4(13.3)	6(1.5)
計	206(100.0)	57(100.0)	66(100.0)	42(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	412(100.0)	
住居形態	自宅(親戚)	108(52.4)	39(68.4)	36(54.5)	17(39.5)	5(45.5)	18(60.0)	223(54.0)
	家族借家	79(38.3)	12(21.7)	29(43.9)	16(37.2)	5(45.5)	11(36.7)	153(37.0)
	他世帯同居	5(2.5)	2(3.5)					7(1.7)
	寮	14(6.8)	4(7.0)	1(1.6)	10(23.3)	1(9.0)	1(3.0)	31(7.5)
	その他							
	計	206(100.0)	57(100.0)	66(100.0)	43(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	413(100.0)
運動部経験	中学	160(79.6)	44(77.2)	52(78.8)	22(74.4)	6(54.5)	24(80.0)	319(78.0)
	高校	114(56.4)	27(49.1)	42(63.6)	24(55.8)	6(54.5)	19(63.3)	232(56.9)
	計	201(100.0)	57(100.0)	66(100.0)	43(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	409(100.0)
種目	指定	23(11.1)	53(93.0)			1(9.1)		77(19.1)
	希望選抜	169(85.9)	4(7.0)	65(100.0)	42(97.7)	10(90.9)	26(89.7)	317(78.5)
	その他	6(3.0)			1(2.3)		3(10.3)	10(2.4)
	計	198(100.0)	57(100.0)	65(100.0)	43(100.0)	11(100.0)	29(100.0)	404(100.0)
	方法	指定	27(20.6)			1(2.4)		
希望選抜	93(74.6)	57(100.0)	65(98.5)	40(97.6)	10(100.0)	24(92.3)	290(88.7)	
その他	6(4.8)		1(1.5)			2(7.7)	9(2.8)	
計	126(100.0)	57(100.0)	66(100.0)	41(100.0)	10(100.0)	26(100.0)	327(100.0)	

大学別に見た調査結果

(2)

		大 学 名						
		A	B	C	D	E	F	計
7 ラ 入	↑ 男	77(39.9)			11(25.6)	7(63.6)	9(31.0)	104(26.7)
	年 女	116(58.6)	57(100.0)		1(5.0)	4(36.4)		178(44.3)
	次 混成	3(2.5)		66(100.0)	30(69.8)		20(69.0)	119(29.0)
	✓ 計	198(100.0)	57(100.0)	66(100.0)	42(100.0)	11(100.0)	29(100.0)	401(100.0)
編 成	↑ 男	60(48.8)			4(9.8)	7(70.0)	10(38.5)	81(25.3)
	年 女	61(49.6)	57(100.0)		2(4.9)	3(30.0)		123(38.0)
	次 混成			66(100.0)	35(85.4)		16(61.5)	117(36.7)
	✓ 計	121(100.0)	57(100.0)	66(100.0)	41(100.0)	10(100.0)	26(100.0)	321(100.0)
種 目 の 満 足 度	↑ 満足	106(53.5)	23(41.1)	40(63.5)	25(59.5)	7(63.6)	20(69.0)	221(53.3)
	年 半 比 例	52(26.3)	23(41.1)	14(22.2)	13(31.0)	3(21.3)	6(20.7)	110(27.5)
	次 不満	40(20.2)	10(17.8)	9(14.3)	4(9.5)	1(9.1)	3(10.3)	69(17.3)
	✓ 計	198(100.0)	56(100.0)	63(100.0)	42(100.0)	11(100.0)	29(100.0)	399(100.0)
度	↑ 満足	67(53.2)	30(53.6)	37(57.8)	26(65.0)	6(60.0)	17(65.4)	183(56.7)
	年 半 比 例	38(30.2)	24(42.9)	20(31.3)	9(22.5)	2(20.0)	6(23.1)	99(31.0)
	次 不満	21(16.7)	2(4.0)	7(10.9)	5(12.5)	2(20.0)	3(11.5)	40(12.4)
	✓ 計	126(100.0)	56(100.0)	64(100.0)	40(100.0)	10(100.0)	26(100.0)	322(100.0)
体 育 実 技 回 数	多い	147(71.0)	37(66.1)	47(71.2)	19(44.2)	7(63.6)	19(63.3)	276(66.7)
	多い		5(8.9)	3(4.5)				8(2.7)
	少ない	53(29.0)	12(21.4)	15(22.7)	24(55.8)	4(36.4)	11(36.7)	119(29.0)
	その他		2(3.6)					2(1.6)
	計	200(100.0)	56(100.0)	65(100.0)	43(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	396(100.0)
体 育 施 設 で の 所 要 時 間	~30分	82(62.6)	38(100.0)	3(6.1)	12(92.3)	2(66.7)	12(85.7)	149(60.0)
	30~60	23(17.6)		42(85.7)		1(33.3)	1(7.1)	67(27.0)
	60~90	13(9.9)		4(8.2)				17(6.9)
	90~120	6(4.6)						6(2.4)
	その他	7(5.3)			1(7.7)		1(7.1)	9(3.6)
	計	131(100.0)	38(100.0)	49(100.0)	13(100.0)	3(100.0)	14(100.0)	248(100.0)
運 動 施 設 利 用	できず	34(19.1)	22(46.8)	41(67.2)	40(95.2)	4(44.4)	7(25.0)	148(40.7)
	できず	144(80.9)	25(53.2)	20(32.8)	2(4.8)	5(55.6)	21(75.0)	217(59.3)
	計	178(100.0)	47(100.0)	61(100.0)	42(100.0)	9(100.0)	28(100.0)	365(100.0)
商 業 施 設	商業施設	13(14.3)	8(20.5)	11(34.4)	5(22.7)		11(50.0)	48(22.7)
	公共施設	44(48.4)	29(74.4)	9(28.1)	10(45.5)	2(50.0)	5(22.7)	100(47.4)
	計	91(100.0)	39(100.0)	32(100.0)	22(100.0)	4(100.0)	22(100.0)	211(100.0)

大学別にみた調査結果

(3)

大 学 名		A	B	C	D	E	F	計
シャワー施設	温水シャワー	118(57.8)	23(41.1)	32(50.8)	15(35.7)		7(23.3)	195(47.9)
	水シャワー	65(31.9)	19(33.9)	14(22.2)	10(23.8)	2(18.2)	8(26.7)	118(29.2)
	ない	21(10.3)	13(23.0)	12(19.0)	15(35.7)	9(81.8)	11(36.7)	81(19.9)
	その他			5(8.0)	2(4.8)		4(13.3)	12(3.0)
	計	204(100.0)	56(100.0)	63(100.0)	42(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	406(100.0)
シャワー利用度	毎回	20(10.9)					1(6.6)	21(7.1)
	ときどき	38(20.8)			6(22.2)		7(46.7)	51(15.7)
	使用しない	124(67.8)	41(95.3)	53(98.1)	17(63.0)	2(100.0)	7(46.7)	242(75.4)
	その他	1(0.5)	2(4.7)	1(1.9)	2(14.8)			2(1.8)
	計	183(100.0)	43(100.0)	54(100.0)	25(100.0)	2(100.0)	15(100.0)	309(100.0)
体育実技必修	賛成	134(65.6)	24(42.9)	40(60.6)	27(62.8)	10(90.9)	22(73.3)	257(62.6)
	どちらか一方	26(12.9)	12(21.4)	8(12.1)	4(9.3)	1(9.1)		51(13.4)
	反対	40(19.5)	20(35.7)	18(27.3)	12(27.9)		8(26.7)	98(24.0)
	計	200(100.0)	56(100.0)	66(100.0)	43(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	406(100.0)
体育実技必修賛成理由	場所時間都合	8(6.8)	2(11.8)	2(5.9)	2(11.2)	2(33.3)	1(6.7)	17(8.3)
	運動不足解消	72(63.2)	10(58.8)	22(64.6)	8(44.4)	1(16.7)	7(46.0)	120(58.5)
	体育地好き	10(8.8)	1(5.9)	1(3.0)	4(22.2)	1(16.7)	4(26.7)	21(10.2)
	健康に良い	13(11.4)	3(17.6)	9(26.5)	4(22.2)	2(33.3)	2(13.3)	33(16.6)
	77%以外の人	10(8.8)					1(6.7)	11(5.4)
	その他		1(5.9)					1(2.0)
	計	113(100.0)	17(100.0)	34(100.0)	18(100.0)	6(100.0)	15(100.0)	203(100.0)
体育実技は、あつた方がよいか	あつた方が良い	170(82.5)	32(78.9)	44(68.2)	42(100.0)	10(90.9)	26(86.7)	324(82.1)
	どちらでもよい	27(13.1)	11(24.1)	16(24.2)		1(9.1)	4(13.3)	59(14.3)
	あつた方が悪い	8(4.4)		5(7.6)				13(3.6)
	計	205(100.0)	43(100.0)	65(100.0)	42(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	396(100.0)
他教科と比べて体育実技は好きか	非常に好き	30(14.5)	4(7.0)	5(7.6)	12(28.6)	2(18.2)	7(23.3)	60(14.5)
	好きの方	78(37.8)	23(40.4)	27(41.0)	18(42.9)	4(36.3)	12(40.0)	162(39.4)
	普通	76(36.7)	24(42.1)	28(42.4)	4(9.5)	3(27.3)	11(36.7)	146(35.3)
	嫌いの方	19(9.0)	6(10.5)	3(5.0)	6(14.3)	2(18.2)		36(8.7)
	大嫌い			3(5.0)	2(4.7)			5(2.1)
	計	203(100.0)	57(100.0)	66(100.0)	42(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	399(100.0)

大学別にみた調査結果

(4)

		大 学 名						
		A	B	C	D	E	F	計
体力運動能力測定	必ずある			59(90.8)	14(32.6)	2(18.2)		75(18.6)
	ときどきある			3(4.6)	12(30.2)	1(9.1)	2(6.6)	18(4.6)
	ない	198(96.1)	54(94.7)			6(54.5)	26(86.9)	288(69.0)
	その他	6(3.9)	3(5.3)	3(4.6)	16(37.2)	2(18.2)	2(6.6)	32(7.7)
	計	206(100.0)	57(100.0)	65(100.0)	43(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	413(100.0)
生活に役立っているか 体育理論は	役立っている	7(6.1)		3(4.8)	1(3.8)	1(10.0)	1(3.5)	13(4.5)
	どちらとも	58(50.4)	37(78.7)	39(62.9)	12(46.2)	3(30.0)	7(24.1)	156(54.1)
	役立っていない	46(40.0)	10(21.3)	19(30.6)	13(50.0)	6(60.0)	21(72.4)	115(39.7)
	その他	3(3.5)						3(1.7)
	計	114(100.0)	47(100.0)	61(100.0)	26(100.0)	10(100.0)	29(100.0)	287(100.0)
生活に役立っているか 保健理論は	役立っている	7(6.0)	2(3.8)	6(10.9)	3(8.3)	2(20.0)	1(3.8)	21(7.2)
	どちらとも	59(52.2)	38(73.1)	40(72.7)	11(30.6)	2(20.0)	4(15.4)	154(52.6)
	役立っていない	45(39.8)	12(23.1)	7(12.7)	21(58.3)	6(60.0)	21(80.8)	112(38.6)
	その他			2(3.7)	1(2.8)			3(1.7)
	計	111(100.0)	52(100.0)	55(100.0)	36(100.0)	10(100.0)	26(100.0)	290(100.0)
健康診断	受けた	146(71.6)	54(94.7)	62(96.9)	24(55.8)	9(81.8)	14(46.7)	309(75.6)
	受けない	58(28.4)	3(5.3)	2(3.1)	19(44.2)	2(18.2)	16(53.3)	100(24.4)
	計	204(100.0)	57(100.0)	64(100.0)	43(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	409(100.0)
受診のきっかけ	友人に勧められた	4(2.7)						4(1.3)
	自主的に健康に悩んだ	51(35.7)		4(6.5)	14(51.9)	3(33.3)	7(50.0)	79(25.8)
	なんとなく	7(4.9)	2(4.4)	3(4.8)	4(14.8)	1(11.1)	1(7.1)	18(5.8)
	大学の健康施設	51(35.7)	27(50.0)	22(35.5)	3(11.1)	3(33.3)		106(34.2)
	その他	30(21.0)	23(45.6)	33(53.2)	4(14.8)	2(22.3)	5(35.8)	97(31.6)
	計	143(100.0)	52(100.0)	62(100.0)	27(100.0)	9(100.0)	14(100.0)	307(100.0)
	受診しなかった理由	知らなかった	8(14.5)		1(50.0)	1(6.7)		7(46.7)
忘れたい	9(16.4)			1(6.7)	1(50.0)		11(12.2)	
都合が悪かった	13(23.6)	1(100.0)		9(60.0)	1(50.0)	2(13.3)	26(28.9)	
めんどうだった	16(29.1)			1(6.7)		3(20.0)	20(22.2)	
健康の不審が	2(3.4)		1(50.0)	1(6.7)		2(13.3)	6(6.7)	
必要を感じなかった	7(12.7)						7(7.8)	
その他				2(13.3)		1(6.7)	3(3.3)	
計	55(100.0)	1(100.0)	2(100.0)	15(100.0)	2(100.0)	15(100.0)	88(100.0)	

大学別にみた調査結果

(5)

		大学名							計
		A	B	C	D	E	F		
最 の 運 動 不 足	感じた	157(76.2)	39(68.4)	48(75.0)	31(72.1)	7(63.6)	22(93.3)	304(73.8)	
	どちらとも	22(10.7)	10(17.5)	6(9.4)	3(7.0)		2(20.0)	43(10.4)	
	感じない	27(13.1)	8(14.1)	10(15.6)	9(20.9)	4(36.4)	6(6.7)	64(15.8)	
	計	206(100.0)	57(100.0)	64(100.0)	43(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	411(100.0)	
何 か し た か ら 始 め	始めた	43(27.9)	9(24.3)	16(33.3)	11(36.7)	1(14.3)	11(50.0)	91(30.5)	
	始めない	111(72.1)	28(75.7)	32(66.7)	19(63.3)	6(85.7)	11(50.0)	207(69.5)	
	計	154(100.0)	37(100.0)	48(100.0)	30(100.0)	7(100.0)	22(100.0)	298(100.0)	
始 め て い な い 理 由	時間がない	74(68.5)	18(78.3)	12(42.9)	13(72.2)	4(66.7)	7(70.0)	128(66.3)	
	金がない	8(7.4)		2(7.1)		2(33.3)	1(10.0)	13(6.7)	
	体力がない	3(3.0)		4(14.3)				7(3.6)	
	身体が太い				1(5.6)			1(0.5)	
	運動が嫌い	4(4.0)						4(2.1)	
	その他	16(14.1)	5(21.7)	10(35.7)	4(22.2)		2(20.0)	37(19.2)	
	計	105(100.0)	23(100.0)	28(100.0)	18(100.0)	6(100.0)	10(100.0)	190(100.0)	
大 学 外 利 用	あり	94(46.1)	40(70.2)	34(52.3)	22(51.2)	4(36.4)	23(76.7)	217(53.0)	
	ない	110(53.9)	17(29.8)	31(47.7)	21(48.8)	7(63.6)	7(23.3)	193(47.0)	
	計	204(100.0)	57(100.0)	65(100.0)	43(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	410(100.0)	
施 設 利 用 回 数	週に(1.2回)	21(22.3)	9(23.1)	6(18.2)	3(13.6)		8(34.8)	47(21.8)	
	月()	17(18.1)	8(20.5)	8(24.2)	1(5.5)		2(8.7)	36(16.7)	
	3月()	15(16.0)	2(5.1)	2(6.1)	4(18.2)	1(25.0)	7(30.4)	31(14.4)	
	6月()	10(10.6)	7(17.9)	3(9.1)	4(18.2)		2(8.7)	26(12.0)	
	1年()	21(22.3)	9(23.1)	12(36.4)	8(36.4)	2(50.0)	2(8.7)	54(25.5)	
	その他	10(10.6)	4(10.3)	2(6.1)	2(9.1)	1(25.0)	2(8.7)	21(9.7)	
	計	94(100.0)	39(100.0)	33(100.0)	22(100.0)	4(100.0)	23(100.0)	216(100.0)	
系 属 部 門 に 属 す	運動部	8(3.9)	2(3.6)	10(15.2)	14(32.6)	1(9.1)		35(8.5)	
	無所属	164(79.6)	40(71.4)	44(66.7)	29(67.4)	9(81.8)	23(76.7)	309(75.1)	
	スポーツ同好会	34(16.5)	14(25.0)	12(18.2)		1(9.1)	7(23.3)	68(16.5)	
	計	206(100.0)	56(100.0)	66(100.0)	43(100.0)	11(100.0)	30(100.0)	412(100.0)	
大 学 外 に 属 す	所属	16(7.8)	21(37.5)	8(12.7)	6(14.0)		7(23.3)	58(14.3)	
	無所属	188(92.2)	35(62.5)	55(87.3)	37(86.0)	10(100.0)	23(76.7)	348(85.7)	
	計	204(100.0)	56(100.0)	63(100.0)	43(100.0)	10(100.0)	30(100.0)	406(100.0)	

大学別にみた調査結果

(6)

		大 学 名						
		A	B	C	D	E	F	計
参加動機 スポーツクラブ	授業	3 (7.3)						3 (3.0)
	友人の紹介	17 (41.5)	17 (70.8)	4 (23.5)	2 (22.2)		7 (87.5)	47 (47.5)
	新聞雑誌	3 (7.3)	1 (4.2)		1 (11.1)			5 (5.1)
	その他	18 (43.9)	6 (25.0)	13 (76.5)	6 (66.7)		1 (12.5)	44 (44.4)
	計	41 (100.0)	24 (100.0)	17 (100.0)	9 (100.0)		8 (100.0)	99 (100.0)
大学の 休憩時間の過ごし方	喫茶店	9 (5.1)	1 (3.0)		1 (4.0)		6 (26.3)	17 (5.4)
	喫茶店	53 (30.3)	12 (36.5)	9 (19.1)	2 (7.4)		6 (26.3)	82 (26.0)
	公園							
	スポーツ				3 (11.2)			3 (1.0)
	図書館	26 (14.9)	1 (3.0)	6 (12.8)	4 (14.8)	5 (55.6)	5 (21.7)	47 (15.2)
	何となく	70 (40.0)	18 (54.5)	25 (53.2)	11 (40.7)	3 (33.3)	5 (21.7)	132 (41.9)
	その他	13 (7.7)	1 (3.0)	7 (14.9)	7 (25.9)	1 (11.1)	1 (4.0)	30 (9.5)
	計	175 (100.0)	33 (100.0)	47 (100.0)	27 (100.0)	9 (100.0)	23 (100.0)	311 (100.0)
現在又は今後の 体育実技に期待すること	運動の解消	80 (44.2)	12 (31.6)	18 (32.7)	11 (33.4)	5 (62.5)	10 (41.7)	136 (40.0)
	技術向上	7 (4.0)	4 (10.4)		2 (6.1)		2 (8.3)	15 (4.7)
	根性		1 (3.0)		1 (3.0)		1 (4.0)	3 (1.6)
	友人の紹介	12 (6.6)			1 (3.0)		2 (8.3)	15 (5.0)
	指導者の声	9 (5.0)			1 (3.0)			10 (3.5)
	乗組の協力	50 (27.6)	16 (42.1)	27 (49.1)	16 (48.5)	3 (37.5)	6 (25.4)	118 (34.7)
	何となく	16 (8.8)	3 (7.9)	6 (10.2)			2 (8.3)	27 (7.9)
	その他	5 (3.0)	1 (3.0)		1 (3.0)		1 (4.0)	8 (2.6)
	計	181 (100.0)	38 (100.0)	51 (100.0)	33 (100.0)	8 (100.0)	24 (100.0)	332 (100.0)

大学別による調査結果

(7)

		大 学 名							計
		A	B	C	D	E	F		
体育実技で感じた事	日常生活に必要	26 (28.9)	12 (26.1)	2 (3.0)	3 (7.3)	1 (10.0)	5 (17.9)	49 (17.9)	
	仲間と切磋			3 (5.2)	2 (4.9)			5 (2.9)	
	球技の楽しさ	23 (25.6)	12 (26.1)	34 (58.6)	20 (48.8)	4 (40.0)	14 (50.0)	107 (39.4)	
	健康の維持増進	19 (21.1)	9 (19.6)	4 (6.9)	8 (19.5)	2 (20.0)	3 (10.7)	45 (16.4)	
	何も感じない	15 (16.7)	11 (23.2)	11 (19.0)	5 (12.2)	1 (10.0)	5 (17.9)	48 (17.5)	
	その他	5 (5.7)		4 (6.9)	3 (7.3)	2 (20.0)	1 (3.5)	15 (5.9)	
	計	88 (100.0)	44 (100.0)	58 (100.0)	41 (100.0)	10 (100.0)	28 (100.0)	269 (100.0)	
単位修得後運動	感じた	66 (68.8)	32 (61.5)	34 (53.1)	36 (85.7)	6 (60.0)	15 (51.7)	190 (64.6)	
	どちらとも	28 (29.2)	17 (32.7)	27 (42.2)	4 (9.5)	4 (40.0)	11 (37.9)	91 (31.0)	
	感じない	2 (2.0)	3 (5.8)	3 (4.7)	2 (4.8)		3 (10.3)	13 (4.4)	
	計	96 (100.0)	52 (100.0)	64 (100.0)	42 (100.0)	10 (100.0)	29 (100.0)	294 (100.0)	
運動を始めた事	始めた	24 (40.0)	5 (16.7)	11 (35.5)	13 (37.1)	2 (33.3)	9 (60.0)	64 (36.0)	
	始めない	36 (60.0)	25 (83.3)	20 (64.5)	22 (62.9)	4 (66.7)	6 (40.0)	113 (64.0)	
	計	60 (100.0)	30 (100.0)	31 (100.0)	35 (100.0)	6 (100.0)	15 (100.0)	178 (100.0)	
単位修得後実技	履修する	24 (25.0)	9 (18.0)	16 (25.0)	22 (52.4)	2 (20.0)	10 (34.5)	84 (28.8)	
	どちらとも	38 (39.6)	20 (40.0)	27 (42.2)	15 (35.7)	4 (40.0)	10 (34.5)	114 (39.0)	
	履修しない	34 (35.4)	21 (42.0)	21 (32.8)	5 (11.9)	4 (40.0)	9 (31.0)	94 (32.2)	
	計	96 (100.0)	50 (100.0)	64 (100.0)	42 (100.0)	10 (100.0)	29 (100.0)	292 (100.0)	
大学体育(実技理論)に関する事	種目	27 (39.7)	3 (13.6)	21 (40.4)	2 (7.4)	3 (33.3)	2 (9.5)	58 (29.0)	
	施設	15 (22.1)	1 (5.0)	3 (5.8)	1 (3.8)	2 (22.2)	2 (9.5)	24 (12.0)	
	指導者				1 (3.8)		1 (4.8)	2 (1.5)	
	内容・時間帯	15 (22.1)	7 (31.5)	20 (38.5)	12 (44.2)	3 (33.3)	8 (38.1)	65 (33.0)	
	特に好む	5 (7.6)	8 (36.3)	2 (3.8)	2 (7.4)		2 (9.5)	19 (9.5)	
	教育	3 (4.5)			2 (7.4)		1 (4.8)	6 (3.0)	
	選択方法	2 (3.0)	3 (13.6)	4 (7.5)	6 (22.2)	1 (11.1)	4 (19.0)	20 (10.5)	
	理論				1 (3.8)		1 (4.8)	2 (1.5)	
計	67 (100.0)	22 (100.0)	49 (100.0)	27 (100.0)	9 (100.0)	21 (100.0)	196 (100.0)		

学年別履修種目満足度 (1年次)

学年	1.	2.	3.	N
1年	57.9 %	35.5 %	6.6 %	76
2年	50.8 %	27.5 %	21.7 %	189
3年	59.3 %	21.0 %	19.8 %	81
4年	61.5 %	26.9 %	11.5 %	52

満足 どちらともいえない 不満

学年別 履習種目満足度 (2年次)

2 年	1.	2.	3.
	51.6 %	37.0 %	11.5 %

満

足

どちらともいえない

不満

N=192

3 年	1.	2.	3.
	63.3 %	19.0 %	17.7 %

N=79

4 年	1.	2.	3.
	64.0 %	28.0 %	8.0 %

注: 1年は除く

N=50

男女別履修種目満足度 (1年次)

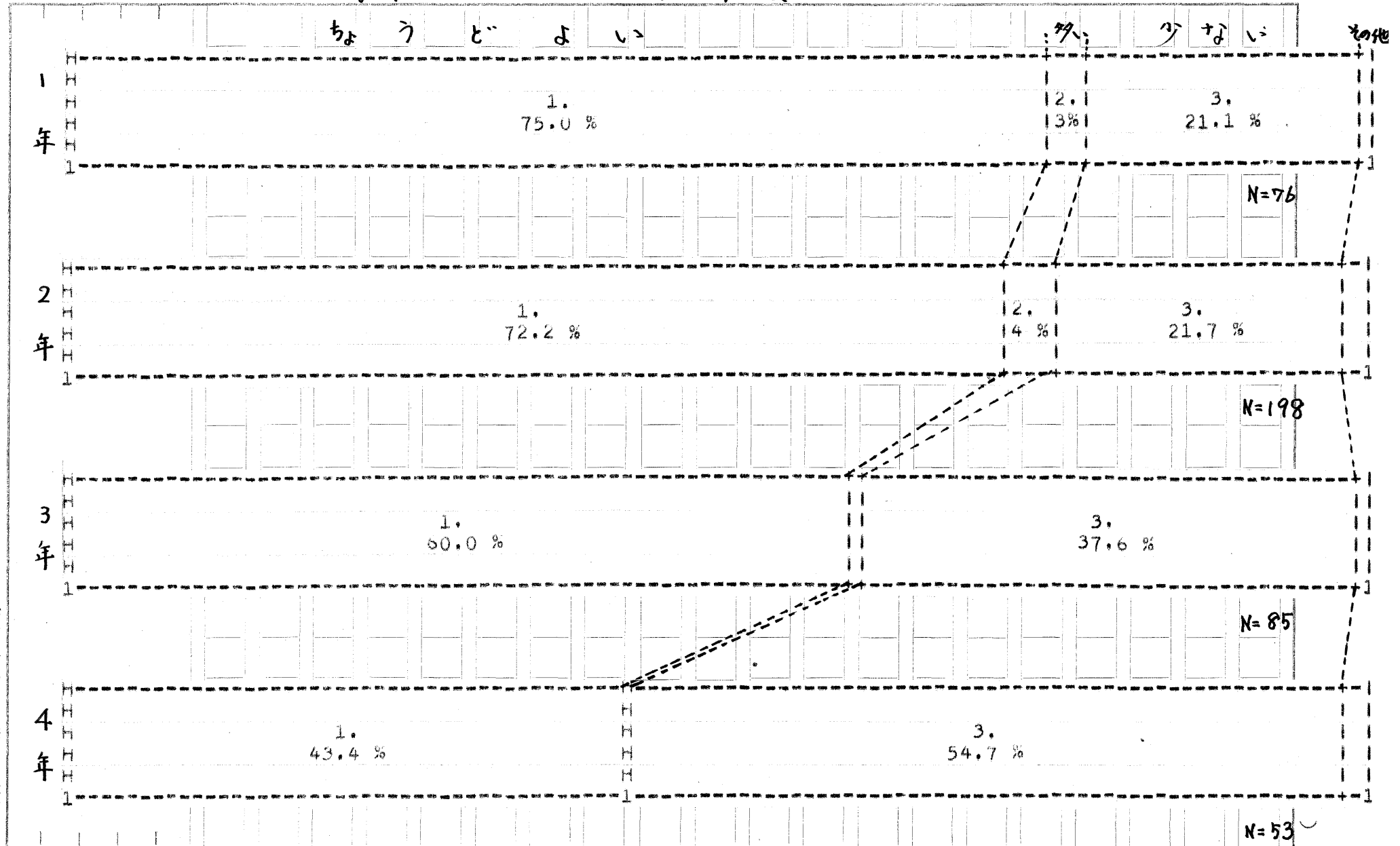
(3)

男	1.	62.7 %	2.	23.2 %	3.	14.1 %
	満足 足 どちらともいえない					不満足
女	1.	49.5 %	2.	30.6 %	3.	19.8 %
	N=177					
男女別履修種目満足度 (2年次)						
男	1.	63.6 %	2.	24.3 %	3.	11.8 %
	満足 足 どちらともいえない					不満足
女	1.	50.6 %	2.	37.1 %	3.	12.4 %
	N=222					

N=170

学年別・体簇技履修回数 満足度

(4)



男女別・体育実技履修回数・満足度

ちよ う と よ い 7% 少 や い

その他

男

1.
61.7 %

3.
35.1 %

N=188

女

1.
70.7 %

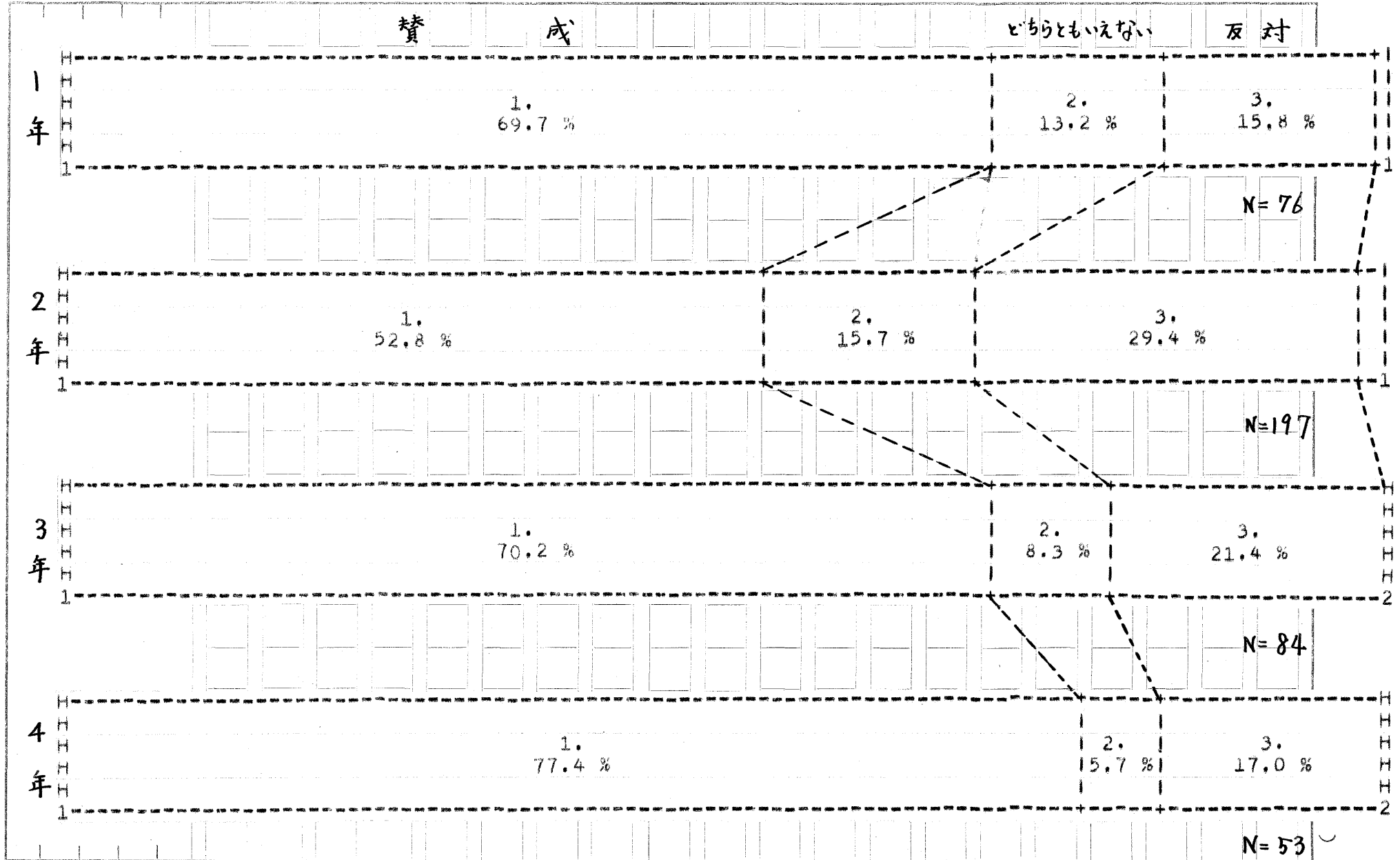
2.
3%

3.
24.0 %

N=225

学年別 体育実技必修について

(6)



男女別 体育実技必修について

(7)

	賛成	どちらでもない	反対
男	1. 67.4 %	2. 9.6 %	3. 22.5 %
女	1. 58.9 %	2. 14.3 %	3. 25.0 %

N=187

N=224

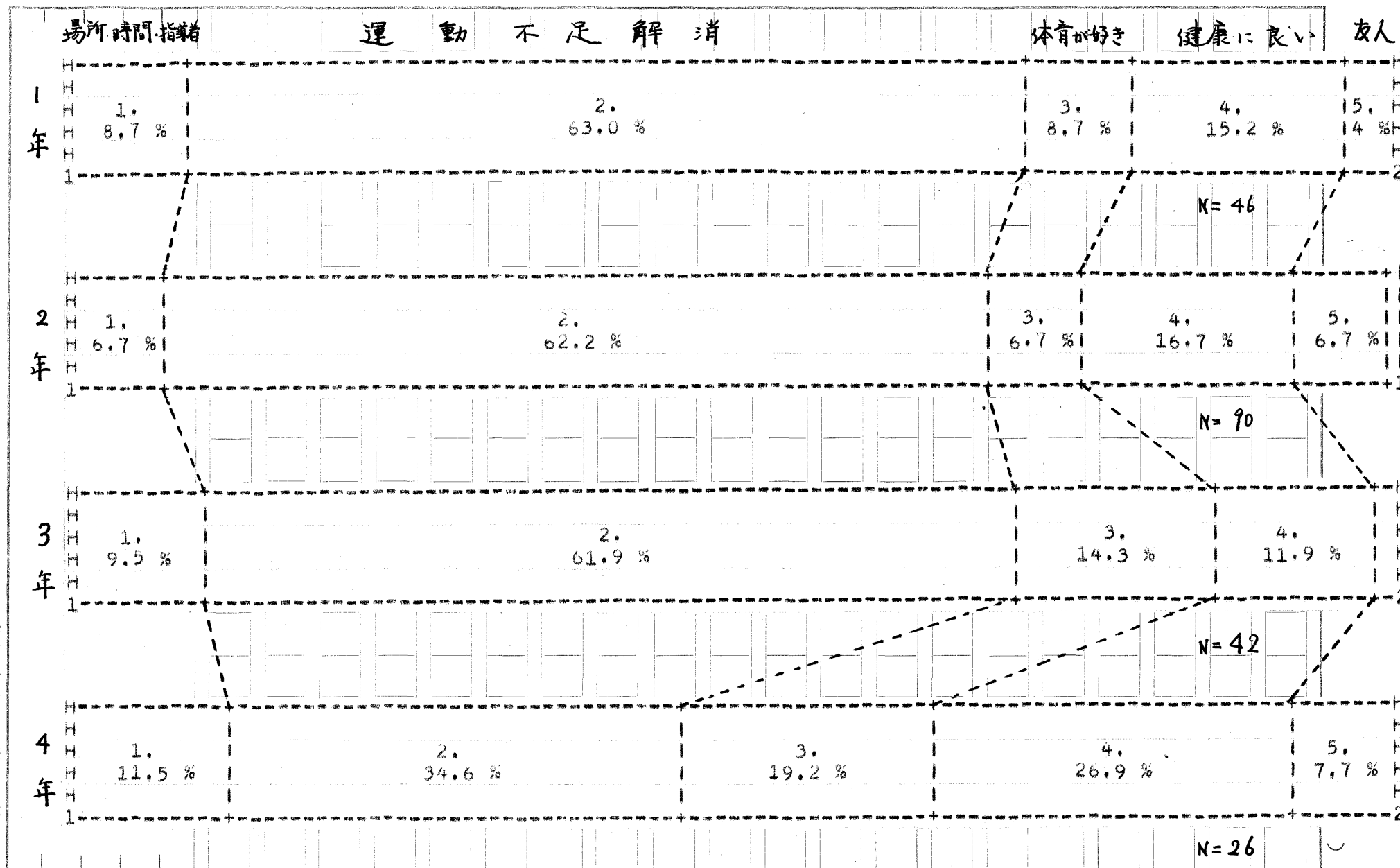
男女別 体育実技必修 賛成理由

	場所・時間・指導者	運動不足解消	体育が好き	健康に良い	友人
男	1. 6.9 %	2. 54.5 %	3. 13.9 %	4. 17.8 %	5. 15.9 %
女	1. 9.6 %	2. 62.5 %	3. 6.7 %	4. 15.4 %	5. 4.8 %

N=104

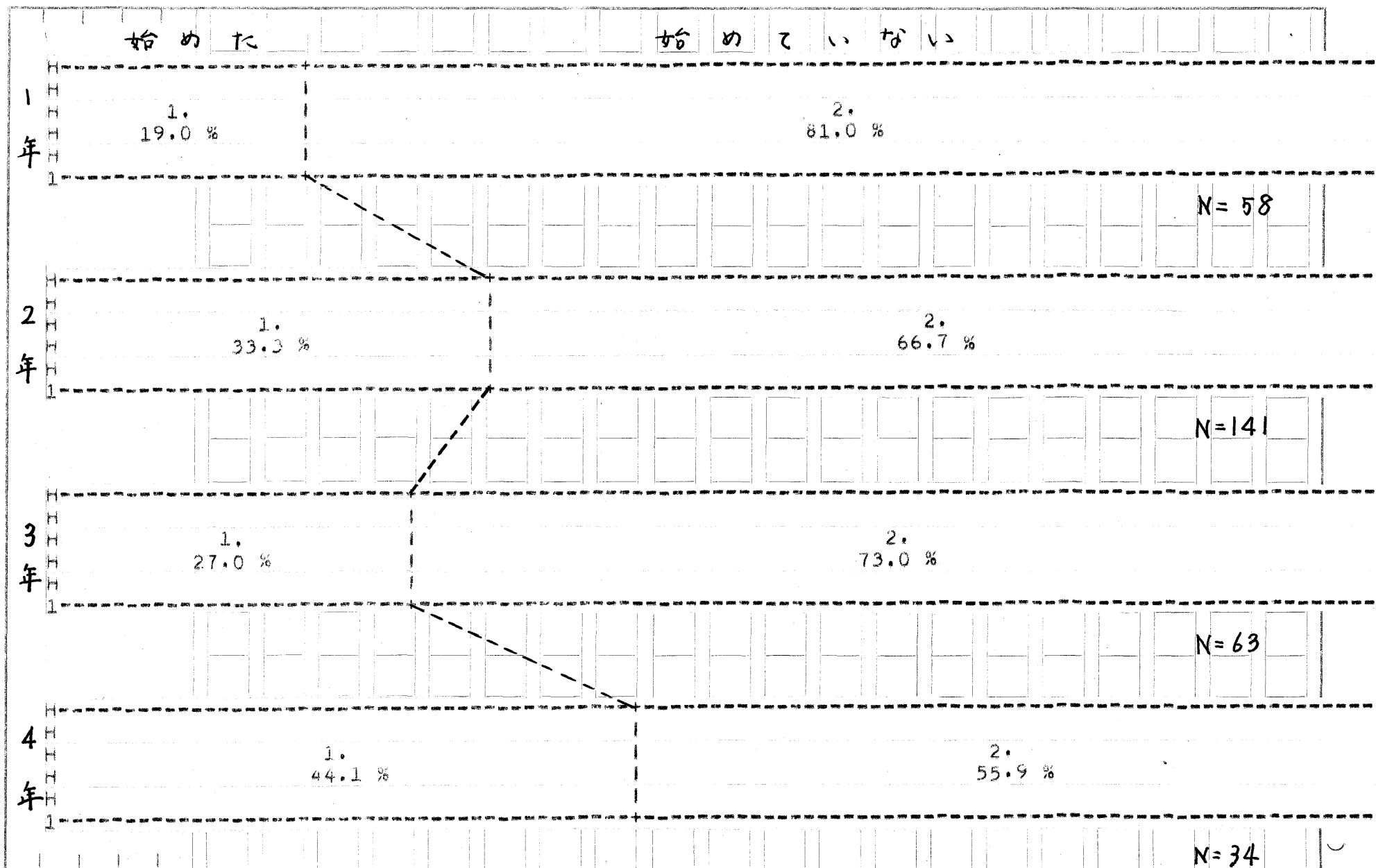
学年別. 体育実技必修賛成理由

(8)



学年別. 体育実技を履修して運動不足を感じて身体活動をはじめた学生. 始めない学生

(9)



男女別、体育実技を履修して運動不足を感じて身体活動を始めた学生、始めない学生

始めた

始めていない

男

1.
36.6 %

2.
63.4 %

N=134

女

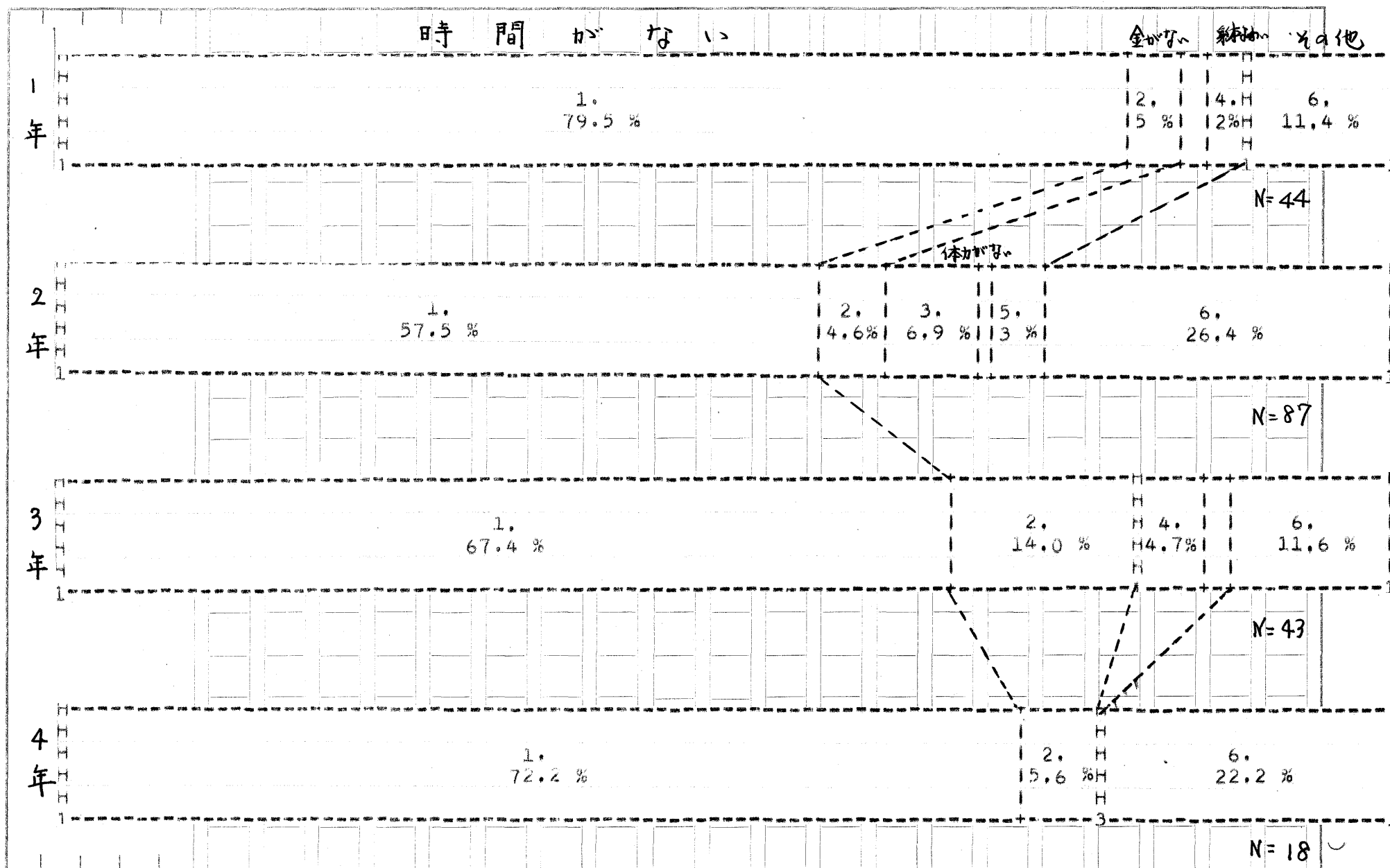
1.
25.8 %

2.
74.2 %

N=163

学年別、体育実技を履修して運動不足を感じたか実践していない理由

(11)



男女別、体育実技を履修して運動不足を感じたが実践していない理由

時間がない

金がない

その他

男

1.
65.4 %

2.
12.3 %

6.
17.3 %

N=81

体力がない
運動嫌いな

女

1.
67.6 %

3.
15.4 %

5.
13%

6.
19.8 %

N=111

男女別. 学内及び学外スポーツクラブ所属者の参加きっかけ

体育実技

友人の紹介

新聞雑誌

入学時の勧誘

男

1.
8.1 %

2.
40.5 %

3.
8.1 %

4.
43.2 %

N = 37

女

2.
51.6 %

3.
13%

4.
45.2 %

N = 62

学年別・男女別・履修した体育実技でどのような事を感じたか

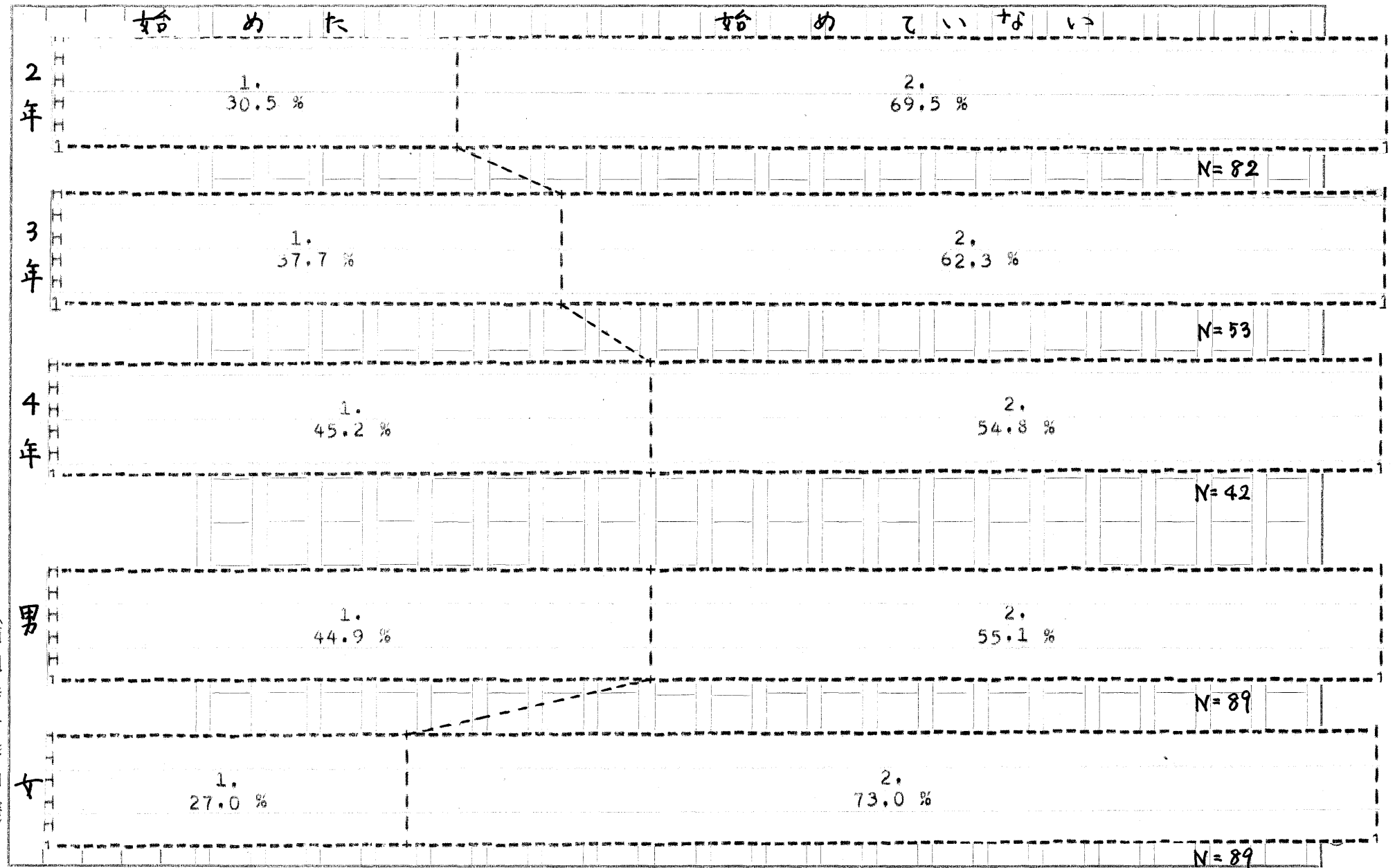
(14)

	1	2	3	4	5	6	
	スポーツを日常生活に活かす	仲間	スポーツの楽しさ	健康の維持増進	何も感じない	その他	
2年	1. 16.6 %		3. 39.3 %		4. 15.9 %	5. 19.3 %	6. 16.2 %
N=145							
3年	1. 17.3 %		3. 35.8 %		4. 19.8 %	5. 19.8 %	6. 6.2 %
N=81							
4年	1. 23.4 %	2. 6.4 %		3. 44.7 %	4. 12.8 %	5. 8.5 %	6. 4 %
N=47							
男	1. 16.8 %		3. 45.8 %		4. 13.7 %	5. 16.0 %	6. 6.1 %
N=131							
女	1. 19.0 %	2. 4 %	3. 33.8 %		4. 19.0 %	5. 18.3 %	6. 5.6 %
N=142							

注：1年は除く

学年別・男女別・単位修得後運動する必要を感じて運動を始めた学生・始めていない学生

(15)

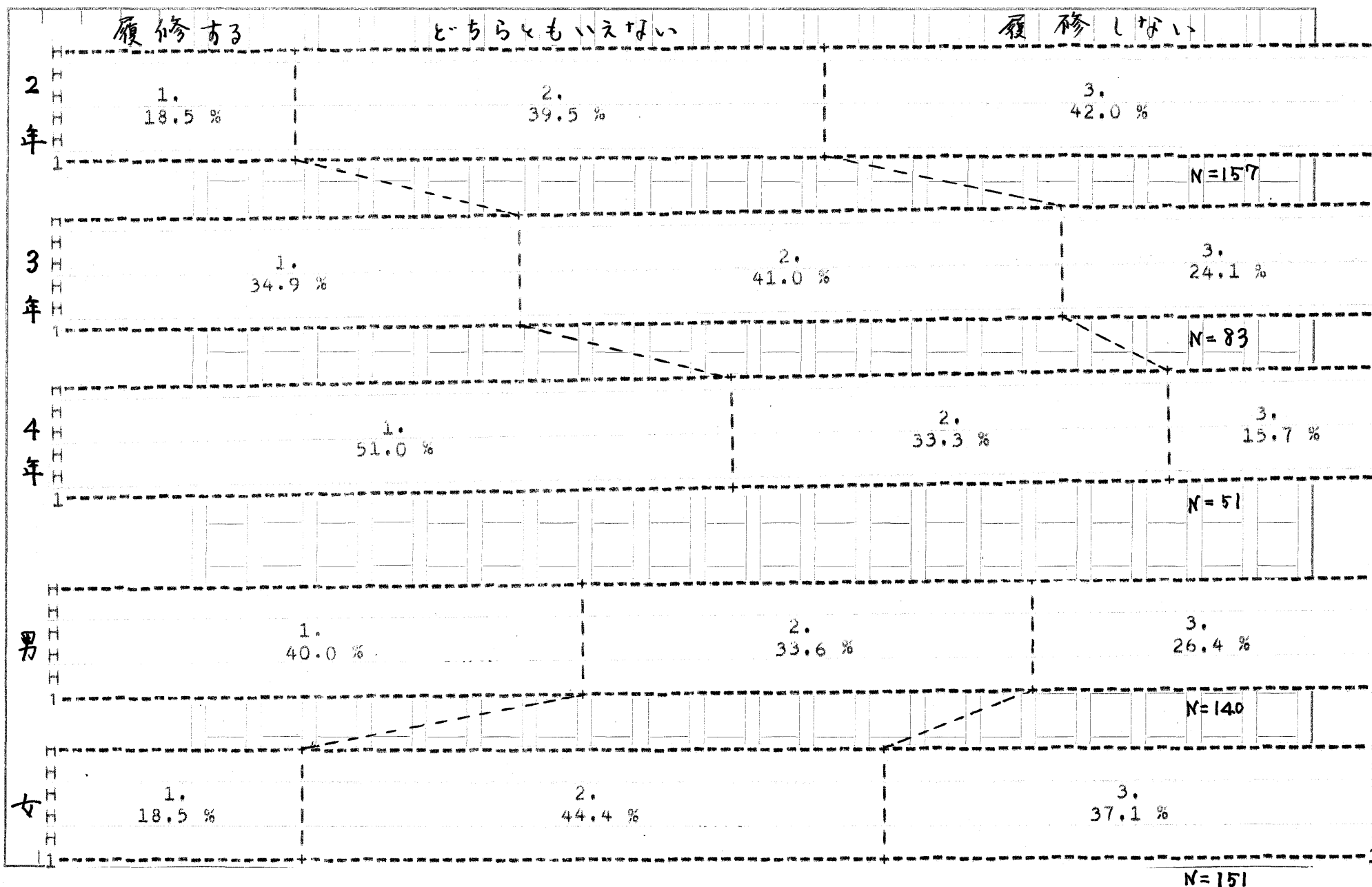


(順天堂大学用箋)

注: 1年は除く

学年別、男女別、単位修得後に選択科目として体育実技が必修か

(16)



学年別 体育理論の内容は生活に役立っているか

(17.)

	役立っている	どちらともいえません	役立っていない	その他
1年	1. 10.0 %	2. 67.5 %	3. 15.0 %	4. 7.5 %
N = 40				
2年	1. 13.3 %	2. 64.2 %	3. 32.4 %	
N = 148				
3年	1. 8.2 %	2. 32.8 %	3. 57.4 %	
N = 61				
4年		2. 38.5 %	3. 61.5 %	
N = 39				

学年別 保健理論の内容は生活に役立っているか

(18)

	役立っている	どちらともいえない			役立っていない	その他
1年	1.		2.		3.	4.
	10.3 %		76.9 %		10.3 %	3%
N=39						
2年	1.		2.		3.	
	6.2 %		67.6 %		24.8 %	
N=145						
3年	1.		2.		3.	
	9.0 %		20.9 %		70.1 %	
N=67						
4年	1.		2.		3.	4.
	4.9%		29.3 %		61.0 %	4.9%
N=41						

男女別・体育理論・保健理論の内容は生活に役立っているか

		役立っている	どちらともいえない	役立っていない	
(体育理論)	男	1. 6.5%	2. 30.6%	3. 56.1%	N=123
	女	1. 1.3%	2. 67.5%	3. 27.1%	
(保健理論)	男	1. 8.2%	2. 40.4%	3. 49.3%	N=146
	女	1. 16.2%	2. 65.1%	3. 27.4%	
					N=146

学年別・男女別 今後の大学体育(実技・理論)に望む事

(20)

	種目			施設	機軸	内容	時間	特=別	機軸	制度	理論
2年	1. 38.9 %			2. 7.4 %		4. 29.6 %		5. 13.9 %		7. 16.5 %	
	N=104										
3年	1. 24.1 %	2. 19.0 %				4. 37.9 %		5. 6.9 %	6. 13%	7. 15.2%	
	N=58										
4年	1. 16.3 %	2. 12.5 %	3. 3%	4. 34.4 %			6. 9.4 %	7. 31.3 %			8. 13%
	N=32										
男	1. 22.0 %			2. 16.5 %			4. 37.6 %	5. 16.4 %	6. 4.6%	7. 7.3 %	8. 13%
	N=109										
女	1. 37.8 %			2. 16.7 %		4. 27.8 %		5. 12.2 %		7. 13.3 %	
	N=90										

注: 1年は除く

付録(5)

χ^2 検定結果表

		対象	χ^2	自由度	有意水準	検定回数
1.	履修種目満足度	男女別	6.71	2	5%	50
2.	体育実技回数満足度	学年別	25.36	3	—	51
		男女別	6.68	2	5%	51
3.	中高運動部経験と 体育実技回数満足度	中・高	0.92	2	—	89
4.	中高の運動部経験と 大学体育実技好嫌	中・高	2.00	4	—	91
5.	小学校体育実技好嫌と 大学体育実技好嫌	小・大	149.43	25	—	92
6.	中学体育実技好嫌と 大学体育実技好嫌	中・大	259.80	25	—	92
7.	高校体育実技好嫌と 大学体育実技好嫌	高・大	401.64	25	—	92
8.	小・中の体育実技好嫌と 体育実技必修賛成	小・中	7.66	2	2.5%	93
9.	中・高の体育実技好嫌と 体育実技必修賛成	中・高	1.86	2	—	93
10.	小・中の体育実技好嫌と 体育実技必修賛成理由	小・中	2.53	2	—	93
11.	中・高の体育実技好嫌と 体育実技必修賛成理由	中・高	19.80	2	—	93
12.	小・高の体育実技好嫌と 体育実技必修	小・高	15.25	2	—	93
13.	小・高の体育実技好嫌と 体育実技必修賛成理由	小・高	26.03	2	—	93
14.	小・中の体育実技好嫌と 単位修得後の体育実技履修	小・中	28.39	4	—	93
15.	小・高の体育実技好嫌と 単位修得後の体育実技履修	小・高	27.77	4	—	93
16.	中・高の体育実技好嫌と 単位修得後の体育実技履修	中・高	43.33	4	—	93

注:有意水準 — は有意差なし

大学保健体育、小学校以来の学校体育、クラブ経験のよきなか、好意的意見、非好意的意見にほぼ二分された。全体的には非好意的意見が、やや多い。

